

豊田市中央図書館蔵安倍季良撰『律呂（山鳥秘要抄）』翻刻校注（二）

明 木 茂 夫

はじめに

本稿は豊田市中央図書館所蔵『律呂』、即ち『山鳥秘要抄』の翻刻及び校注である。底本の詳細については拙稿「豊田市中央図書館蔵安倍季良撰『律呂（山鳥秘要抄）』翻刻校注（一）」（中京大学『国際教養学部論叢』第12巻第1号2019）の「解題」、及び「豊田市中央図書館蔵安倍季良撰抄本『律呂』について ― 解題及び『山鳥秘要抄』諸伝本との比較」（武内恵美子編『近世日本と楽の諸相』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター2019）をご覧いただきたい。今回の（二）には、

5、反音之事（第29葉表～第38葉表）

6、本朝呂律を陰陽と用ひ来説（第39葉表～第46葉裏）

の各条の翻刻と校注を収めた。その他の条については拙稿その（一）と（三）を参照されたい。なお本翻刻校注に於ける各条の収録状況は以下の如くである。

翻刻校注（二）

1、古律新律之事

2、律呂名儀両様に覚悟すべき事

2-1、第一 六律六呂の事

2-2、第二 本朝音曲楽曲のうへにて律音呂音と云事

- 3、半呂半律の調といふ事
- 4、律七聲塩梅の二声名両説の事

翻刻校注 (二)

- 5、反音之事
- 6、本朝呂律を陽陰と用ひ来説

翻刻校注 (三)

- 7、唐燕楽二一八調略図
- 8、今伝来調子根元之事
- 9、本朝の楽書むかしは廿八調の儀所見の事
- 10、跋一（むかしはかやうに廿八調の事を）
- 11、跋二（右一卷依有恩命入覧殿下鷹司殿之処）
- 12、かへしものうたの事

またここで参照した『山鳥秘要抄』とそれに直接関連する主な抄本は、次の如くである。

- 1、安倍家所蔵『山鳥秘要抄』 〓 安倍家原本
- 2、彦根城博物館所蔵『山鳥秘要抄 律』 〓 彦根本
- 3、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『山鳥秘要抄』 〓 京大本
- 4、国会図書館所蔵『山鳥秘要抄』 〓 国会図書館本
- 5、静嘉堂文庫所蔵『山鳥秘要抄』 〓 静嘉堂本
- 6、東北大学附属図書館和算資料平山文庫所蔵『律呂抄』 〓 東北大本
- 7、山井景昭氏所蔵本『楽律抄』 〓 山井家本
- 8、東京藝術大学附属図書館所蔵『山鳥秘要録中律呂之論』 〓 藝大本
- 9、西尾市岩瀬文庫所蔵『呂律反音事』 〓 岩瀬文庫本

※本稿は平成三十年度科学研究費補助金基盤研究（C）「南宋の文人歌曲創作論における転調理論の研究」（18K00149）の研究成果である。

※執筆の都合上、本翻刻校注の（一）と（三）に遅れて（二）を刊行することとなった。刊行時期が前後したことをここにお詫び申し上げる。

なお（一）は中京大学『国際教養学部論叢』第12巻第1号（二〇一九）を、（三）は同第12巻第2号（二〇二〇）をそれぞれ参照願いたい。

翻刻・校注

凡例

- ・原則として常用字体を用いた。但し、一部底本の表記に従ったものもある。例えば「聲」と「声（異体字）」は一定の使い分けをしている可能性もあるようなので底本の表記に従った。また「一越調」「壹越調」は「壹越調」とするなど、調子の名前も表記を統一した部分がある。
- ・底本文に無い句読点、濁点・半濁点を補った。
- ・底本の朱墨部分は太字を以て表記した。
- ・「フ」は「こと」とするなど、合略字は仮名に起こして表記した。
- ・「々」「ゝ」「く」等のおどり字は原則として底本に従うが、句読点を跨ぐ場合など一部本来の文字に改めた箇所がある（例えば「宮生徴、ゝ生商」↓「宮生徴、徴生商」）。
- ・割り注（もしくはそれに準ずる注）は「」内に収めた。上欄の頭注は本文上方に置いた。
- ・翻刻本文の改行は底本の改行位置に従った。但し割注が次の行に跨がる場合はこの限りではない。
- ・底本の頁の切れ目を「」を以て示した。
- ・底本の文字を翻刻に於いて改めた箇所については【校記】で説明を加えた。
- ・傍書はできる限り原本に近い形で記した。但し、小字の傍書、もしくはいわゆる「見せ消ち」によって本文の誤字を修正している箇所については、本文の誤りを修正し、傍書や見せ消ちは省略した上で【校記】にその旨を記した。
- ・本文の文字の右に添えた※は後に【校記】が、○は後に【注】があることをそれぞれ示す。

5 反音之事（第29葉表～第38葉表）

私云、御遊^{*}の時先呂遊ありて反音になりて、律遊是定れる事也。其本意

をしらざれば、いかなる事にて反音といふ事なりとしらず。これは同均なるのゆへなり。^{*}

「全体双調と云ハ夾鍾均の商調なり。同均にあらず」本朝の習に呂のしらべは中呂を宮として七声を次第に立たり。^{*}

是即中呂均なり。扱平調はもとより中呂

均の羽調なり。これによて七声かわりなし。^{*}

しかれば初に宮調を奏して其羽調に反

音することなり。

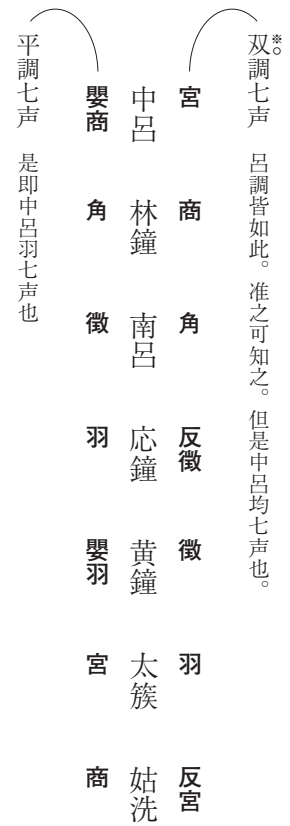
^{*}今世箏弾法むかしにかわりて律は五声に

しらめ、呂は元より五声に弾ず。かたゞ反

音の儀なし。本意を失へり。古譜を見て

能々これを解すべし。此事便覧のた

め左に図したり。」



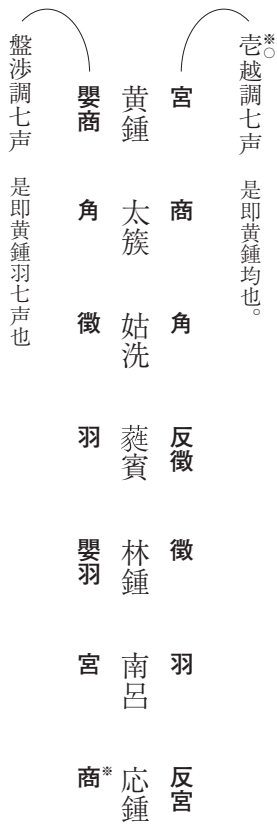
如此同均也。則廿八調より出たる儀也。依之反音に成なり。大原声明師是を羽調の反音とこれを云。

全体双調は夾鐘均の商調也。樂の言則春庭樂

柳花園皆半呂半律の曲也。是夾鐘商の樂なり。

然れども本朝の習、呂のしらべと云ハ中呂を宮と

て七声を定めたり。これによりて能反り音に叶へり。」



如此同均也。是又廿八調より出たることなり。

但壹越調と云ハ無射均の商調也。樂の言ハ

則多くハ半呂半律なり。是則无射均の七声を備たり。本朝呂のしらべハ壹越調なれば即

黄鍾を宮として七声を立たり。是即黄鍾均

なれば盤渉調ハ黄鍾羽によりて反音になる也。

一御遊には呂は双調、律ハ平調、是定たる」

事なり。又呂ニは壹越調、律ニは盤渉調を

御遊に用られたる例、御遊部類に毎度見へた

り。又大法会四ヶ法用の楽に唄、散花、贊

までハ壹越調の楽を用ひ、梵音、錫杖に至

盤渉調楽を用られたる例、古記繁多也。

皆反音の儀也。

黄鍾調 呂七声也。

宮	林鍾*	嬰商
商	南呂	角
角	応鍾	徵
反徵	大呂	羽
徵	太簇	嬰羽*
羽	姑洗	宮
反宮	蕤賓*	商*

下無調 律七声也」

是又同均なれども、今世下無調の楽なければ

巨細に及ばず。

又声明道ニは反音の事専用の習なり。或甲乙

反音、商の反音、羽の反音など申て唱物一つの中

に反音ある也。

楽曲の習にもあるべけれども、今世人いたく云ぬ事に

成にたり。伝来筆纂抄^{*}も、宗明楽の内第六大鼓

まへ平調音と季長朝臣注されたり。

声明用心集云、沙陀調曲安楽塩一徳塩洪河鳥

等羽調の反音を兼とあり。太食調曲大平楽急徴調の

反音を兼とあり。此余数曲不能枚挙。

私考皆其謂分明也。能々可考。」

残。夜抄云、調子のうつりかハリめといふハまづ

しらべーをしらめたるに、こと聲のいできたる

なべてハわろし。それにわろからでよきあり。

これをかへりこゑといふ。これハ呂より律ニか

へる、^{*}律より呂につたふ。其聲の位をよくく心

えつれば、^{*}こと調子にうつれども、やがてよし。ふるき

略頌ニ云、下一盤渉還双調、平大同音上黄鍾。

又云、双調平調上黄鍾、下一盤渉還双調と

いふハ、そう調より平調ニかへり、平調より上无

調ニかへり、上无調より黄鍾調ニかへり、黄鍾調より

下无調にかへり、下无調より一こッ調ニかへり、^{*}一越

調より盤渉調ニかへり、^{*}盤渉調より双調ニかへる

べしとなり。これハ笛一がうちの事にて、かたのご

とくつゝけたれども、まことしき声の位ハあハぬ也。^{*}

この中に双調と平調とうつりよく、一越調と盤渉調と又うつりよし。又黄鍾調と下無

調とハよし。此外のかへりこゑハいといみじくな

し。これらハ十二律といふことをよく／＼心えてし」

るべき事也。これらまでハ女房のこまかのさたにをよまじけれバ、くハしからず。^{*}

実兼公宰円僧都と二変律に称する事を問答の書の中、双調平調同均事を述べられたり。

以之案之、妙音院殿御流、孝道朝臣并

西園寺相国実兼公、皆二十八調の説を

用ひ給を見へたり。反音の儀此条可

為正説者也。

今一説の事 笛の穴にて立たる説」

管絃音義曰、夫返音者従先調子乙音一重高^{*}

音以為次調子甲音、從此甲音三重下音以為乙音。

如此次第輪環、無始、無際無限、名為返音輪転也。^{*}

或亦所以名返音者、凡此七音、皆是自甲至乙。

惣有四重音、是則一音中四時音也。四時者即春^{*}

夏秋冬之四季也。故知甲者音始也。乙者音終也。^{*}

而返音時、皆以前第三秋位乙音、為後第一春^{*}

位甲音。如彼五声等種、物体雖一、秋熟位名^{*}

果。春植時為因。此七音如此、以先調子第三秋

之果音、為次調子第一春之因音也。前果返為

後因、故名返音也。是則五声五行音、故其儀

相同也。又云凡返音時越二音、故各於其間

有二調子。此又以返音次第輪転也。起越一音

至次調子者、秋音返成春音、故逆越夏一音

也。謂如平調音也。余例之可知之云々。

私云、以上取要注之。此説は笛の穴より如形つゞけ

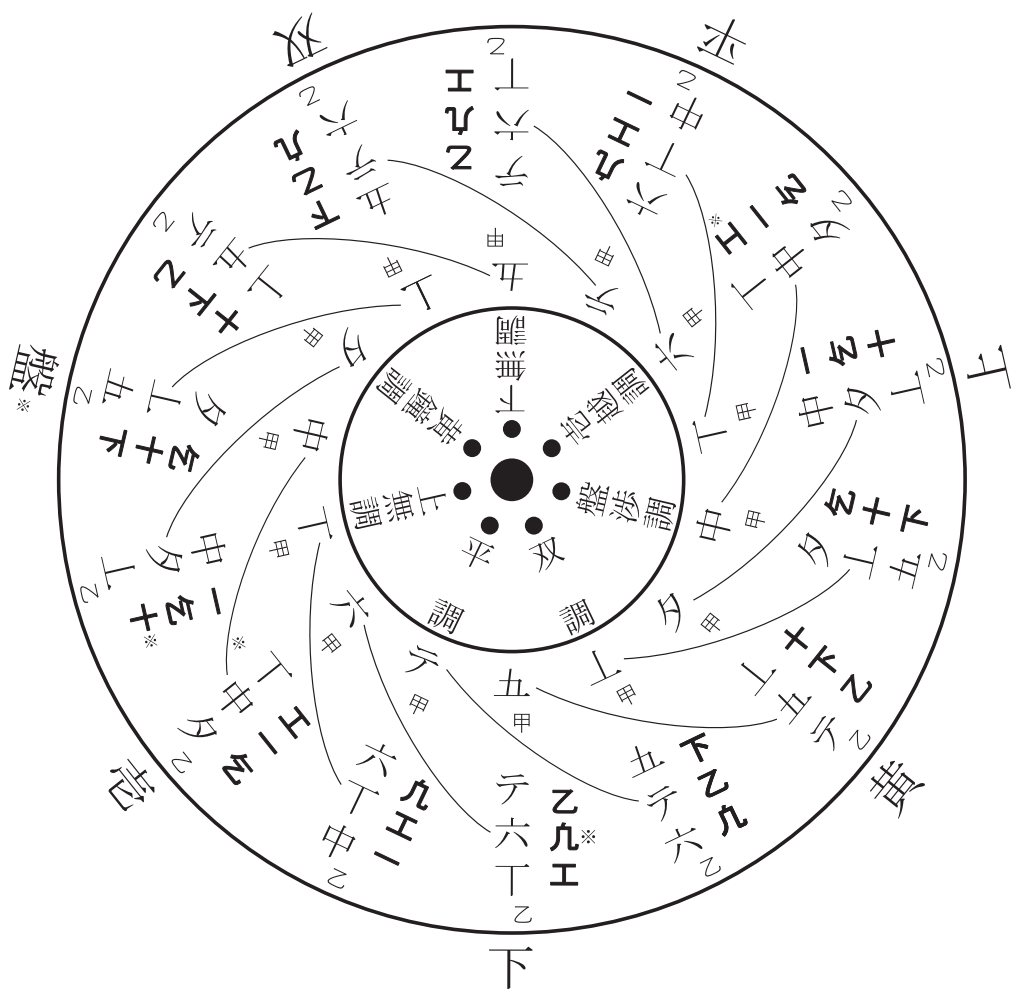
たる説なり。たとへばテ五上タ中丁六此七音の中

四ツを取、テ六丁中第一のテを甲とし、中を乙として、

先初のテより第三の中の音に反音するなり。但

これは道理とにて音律の反音ニは位あハぬなり。」

図 転 輪 音 返*



又曰、仁王經曰、生老病死、輪転無際、即此義也。

或亦所以名返音者、凡此七音、皆是自甲

至乙、惣有四重音、是則一音中四時音也。四^{*}

時者謂有情生老病死、世界生住異滅也。

生住異滅者即春夏秋冬之四時也。故知

甲者音始也。乙者音終也。謂春位音名甲、

減位音名乙也。而返音時、皆以前第三秋

位乙音為後第一春位甲音。如彼五穀

等種、物體雖一、秋熟位名果。春殖[」]

時名因。此七音如此、以先調子第三秋之果音

為次調子第一春之因音也。前果返為後

因、故名返音也。云々

私云、右の説は笛の七音にて次第して

因果の道理をもて立たる説なり。よりて

ま^{*}ことの音の位におきてハ双調と平調、

𪛗越調と盤渉調、黄鍾調と下无調

此三調の外は反音せず。されば孝道朝

臣も是は十二律を能々心得て知るべ[」]

き事なりと残夜抄にハ注されたり。只

かやうの説もあると云事を覚悟のた

めに注しおきぬ。

体源抄云、或記云、御遊に必双調ヲ用ラル

事ハ双調ハ是仁徳ナリ。君ノ恩ヲモテ彼徳ヲ嘆ズル故也。

統。秋朝臣私云、御遊ニ双調ヲカナラズ用勿論ナリ。又律ニハ平調ヲ用。然バ前ノ口伝ナラバ平調ハ臣ニツカサドル。仍君臣ノ徳ヲ奏スルナルベシ。是随分ノ口伝ナリ。

今案、双調を春のしらべ、平調を秋のしらべと古き物語などに見へたれば、

春秋の儀によりて必此反音を用

らる事有。又双調を仁徳と云ハ則

平調は義徳なり。然れば仁義の

徳を奏するなるべし。

又尙越調盤渉調の時は信智の徳を奏、

黄鍾調は礼の徳目を奏するべし。」

又右の図のことく、本朝の習ハ呂ハ宮調にて

律は其羽調なれば、宮ハ五音のはじめ

羽ハ五音の終り、其いわれある歟。楽書要

録五音の本文を載たる文ニ云、

宮為君、君音調則君道得、君道得

則夫和妻柔、宮室制度、各得其宜、

稼穡熟成、天下和平、四海冥服、鎮星

修度、麒麟在郊「麒麟者土之精也」、聖人自来、

宮乱則荒。」

商為臣、商音調則臣道得、臣道得則
節義廉直、謹身奉上、賞不違所讎*
罰不阿所愛、不畏強禦、各濟其任、兵
革不用、刑伐不作、太白修度、白虎在
郊、商乱則陂。

角為人、角音調則人道得、人道得則
君有惻隱之心、好生惡穀、不奪人時、同
其憂樂、人有仁施之行而無爭奪之心、
不隱山藪、競遊道芸、歲星修度、和風
順節、蒼龍在沼、□木並生、角乱則憂。
徵為事、徵音調則尊卑有別、貴賤

有差、慈讓在心、長幼有節、事無稽遲、
必得其宜、熒惑修度、鳳凰來遊、徵乱
則衰。

羽為物、羽音調則倉廩実貨賄通*
四人安業、各獲其利、宗廟致敬、鬼神
降祉、辰星修度、玄武來遊、羽乱則
危。」

【校記】

※御遊の時…… 岩瀬文庫本に異文あり。左の注を参照。

※これは同均…… 静嘉堂本に異文あり。左の注を参照。

※立たり 底本「立たる」に作る。彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・岩瀬文庫本「立たり」に、藝大本「立タリ」にそれぞれ作る。国会図

書館本「たる」に作るも「る」の右に朱墨で「り」の小字傍書あり。今諸本に従い「立たり」に改める。

※これにて 底本・彦根本・京大本・国会図書館本・東北大本・「これにて」に、藝大本「コレニヨテ」にそれぞれ作る。静嘉堂本「これによりて」に作る。岩瀬文庫本この箇所を「扱平調ハ中呂均の羽調は七声かわることなければなり」とする。

※かわりなし 底本・彦根本・京大本・東北大本「かわりなし」に、藝大本「カハリナシ」にそれぞれ作る。国会図書館本「わ」の右に朱墨で「は」の小字傍書あり。静嘉堂本「かわることなし」に作る。岩瀬文庫本「かわることなければなり」に作る。

※今世等弾法…… 静嘉堂本・岩瀬文庫本に異文あり。左の注を参照。

※双調七声 底本・諸本、「双調七声」と「平調七声」から引かれた朱墨の曲線はそれぞれ「宮」と「嬰商」の行頭に繋がっているが、藝大本のみ「双調七声」と「平調七声」から出た曲線がいずれも「中呂」の行頭に繋がっている。ここは「双調」と「平調」の「七声」を示すための曲線だと考えられるので、底本・諸本に従う。以下「壹越超」「盤渉調」「黄鍾調」「下無調」の図表についても同様。

※如此同均也…… 岩瀬文庫本に異文あり。左の注を参照。

※これを云 藝大本この箇所を「是ヲ羽調ノ反音ト云」とする。

※本朝の習 国会図書館本「本調の習」に作るも「調」の右に朱墨で「朝」の小字傍書あり。

※宮とて 藝大本「中呂を宮とて」を「中呂ヲ名トテ」に作るも、見せ消ちで「名」を「呂」に修正している。但しこの見せ消ちの「呂」は「宮」の誤りだと思われる。

※壹越調七声 底本「壹越調」から「宮」に繋がる朱墨曲線を欠くも、今諸本に従いこれを補う。

※商 藝大本「商」を「角」に作るも誤りか。諸本いずれも「商」に作る。

※即 藝大本「即」を「師」に作るも誤りか。諸本いずれも「即」に作る。

※一御遊には 藝大本「一」字を欠き、「御遊には」に作る。国会図書館本この行のみ一字分行頭を高くしている。

※林鍾 藝大本「黄鍾」に作るも誤り。

※嬰羽（朱墨） 底本「羽」に作り、彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「嬰羽」に作る。国会図書館本「羽」に作るもその左に朱墨で「嬰羽乎」との小字傍書あり。「羽」が「大呂」であれば「太簇」は当然「嬰羽」であるため、今「嬰羽」に改める。

※商 藝大本「角」に作るも誤り。

※筆築抄 底本・彦根本・京大本・東北大本「筆築物」に作る。国会図書館本「筆築物」に作るも「物」の右上に朱墨で「抄」の小字傍書あり。

静嘉堂本・藝大本「抄」に作る。ここは安倍家伝来の『筆策抄』を言うと思われる、今「筆策抄」に改める。

※律二かへる 彦根本・岩瀬文庫本「かへり」に作る。『残夜抄』の該当箇所は「かへる」に作る。

※こと調子に 底本・東北大本「こと調子うつれども」に作る。彦根本・京大本・静嘉堂本・岩瀬文庫本「こと調子にうつれども」に作る。国会図書館本「こと調子うつれども」に作るも「子」の右に朱墨で「に」の小字傍書あり。『残夜抄』の該当箇所、伏見宮本は「いと調子にうつれども」に作り、群書類従本は「こと調子にうつれども」に作る。ここは「異調子に移る」の意であると思われるため、今「こと調子に」に改める。

※略頌 岩瀬本「略頌」に作る。「頌」の誤りか。

※一こツ調二かへり 底本・京大本・国会図書館本・静嘉堂本・東北大本・岩瀬文庫本「かへる」に作る。彦根本「かへり」に作る。『残夜抄』の該当箇所は「かへり」に作る。今「かへり」に改める。

※盤渉調二かへり 底本・京大本・国会図書館本・静嘉堂本・東北大本・岩瀬文庫本「かへる」に作る。彦根本「かへり」に作る。『残夜抄』の該当箇所、伏見宮本は「かへる」に作り、同群書類従本は「かへり」に作る。今「かへり」に改める。

※双調二かへるべし 底本・静嘉堂本・東北大本「かへりべし」に作る。彦根本・京大本・岩瀬文庫本「かへるべし」に作る。国会図書館本「かへりべし」に作るも「り」の右に朱墨で「る」の小字傍書あり。『残夜抄』の該当箇所は「かへるべし」に作る。今「かへるべし」に改める。

※まとしき 底本・彦根本・静嘉堂本・東北大本・岩瀬文庫本「まとしき声」に作る。京大本「まことしき声」に作る。国会図書館本「まとしき声」に作るも「まと」の間に朱墨で「こ」の小字傍書あり。『残夜抄』の該当箇所、伏見宮本は「まとしき声」に作り、同群書類従本は「まことしき声」に作る。今「まことしき声」に改める。

※くはしからず 底本・彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本「くはしからず」に作る。国会図書館本「くわしからず」に作る。岩瀬文庫本「女房の」から「くはしからず」までを欠く。『残夜抄』の該当箇所、伏見宮本は「くるしからず」に作り、同群書類従本は「くはしからず」に作る。

※管絃音義曰 季良は『管絃音義』を引くに当たって本文の順番を入れ替えつつ、適宜省略を行い、さらに一部テキストを重複引用している。左の『管絃音義』の注を参照。

※無始、無際無限 『管絃音義』の該当箇所、「無始無終、無際無限」に作る。

※四時者即春夏秋冬之四季也 『管絃音義』の該当箇所、「四時者謂有情生老病死、世界生住異滅也。生住異滅者即春夏秋冬之四季也」に作る。

※乙者音終也。而返音時『管絃音義』の該当箇所、「音始也。乙者音終也。謂生位音名甲、減位音名乙也。而返音時」に作る。

※第三秋位乙音『管絃音義』の該当箇所、「第三異位音」に作る。『群書類従』本には「第三秋位乙音」の異文があることが示されている。

※如彼五声等種『管絃音義』の該当箇所、「如彼五穀等種」に作る。

※春植時為因『管絃音義』の該当箇所、「春殖時名因」に作る。

※前果返為後因『管絃音義』の該当箇所、「前果返為後果成因」に作る。

※是則五声五行音『管絃音義』の該当箇所、「是則五穀五行味、五音五行音」に作る。

※越二音『管絃音義』の該当箇所、「越一音」に作る。『群書類従』本には「越二音」の異文があることが示されている。

※二調子『管絃音義』の該当箇所、「一調子」に作る。『群書類従』本には「二調子」の異文があることが示されている。

※此又『管絃音義』の該当箇所、「此亦」に作る。

※返成春音 底本・諸本いずれも「返成音」に作る。『管絃音義』の該当箇所は「返成春音」に作る。ここは「秋音返成春音」（秋音返りて春音と成る）でなければ文意が通じないため、今『管絃音義』に従い「返成春音」に改める。

※謂如平調音也『管絃音義』の該当箇所は「謂如平調音返上無調音時、從下至下。故越六一音也」に作る（カッコ内は『群書類従』本の示す異文）。

※余例之可知之『管絃音義』の該当箇所は「余例之可知」に作る。

※返音輪転図 円の中心の丸、その周囲の「双調」「平調」「上無調」「黄鐘調」「下無調」「𦵏越調」「盤涉調」の上に付された丸、各調の「乙音一重高音」と「甲音」を結ぶ曲線、及び各調の笛譜の右に付された笙譜は、いずれも底本では朱墨となっている。

※返音輪転図 外円円周部六時の方向、「下（下無調）」の笛譜「六」の右の笙譜、底本「凡」に作るも、彦根本・京大本・国会図書館本・静嘉堂本・東北大本・藝大本に従い今「凡」に改める。

※返音輪転図 外円円周部八時方向の「𦵏（𦵏越調）」の笛譜「中」と、十時方向の「盤涉調」の笛譜「中」を結ぶ朱墨の線、底本・東北大本は「𦵏（𦵏越調）」の笛譜「夕」を結ぶも、彦根本・京大本・国会図書館本・静嘉堂本・藝大本が「中」を結ぶのに従い今改める。なお国会図書館本には一旦「夕」を結んだ後、それを消して「中」を結ぶよう修正した跡が見える。

※返音輪転図 外円円周部九時の方向、「上無調」の笛譜「上」の右の笙譜、底本・彦根本・京大本・国会図書館本・東北大本「丁」に作るも、静嘉堂本・藝大本に従い今「十」に改める。

※返音輪転図 外円円周部十時の方向、彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本「盤渉調」を示す「盤」の字があるも、底本・国会図書館本はこれを欠く。『管絃音義』の該当箇所「盤渉調」に作る。今「盤」を補う。

※返音輪転図 外円円周部二時の方向、「一越調」の笛譜「丁」の右の笙譜、底本・国会図書館本「二」に作るも、彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本に従い今「工」に改める。

※四時者〱即春夏秋冬之四季也 この部分を右に重複して引用した箇所では「四時間者即春夏秋冬之四季也」としていたのに対して、ここでは『管絃音義』の該当箇所と同じく、「四時者謂有情生老病死、世界生住異滅也。生住異滅者即春夏秋冬之四季也」に作る。但し、生住異滅（二箇所）は底本・彦根本・京大本・東北大本「生住異滅」に作り、静嘉堂本・藝大本「生住異滅」に作る。国会図書館本凡「生住異滅」に作るも「侄」の右に朱墨で「住」の小字傍書あり。『管絃音義』の該当箇所「生住異滅」に作る。今「生住異滅」に従う。

※乙者音終也〱而返音時 この部分を右に重複して引用した箇所では「乙者音終也。而返音時」としていたのに対して、ここでは『管絃音義』の該当箇所と同じく、「乙者音終也。謂生位音名甲、減位音名乙也。而返音時」に作る。

※如彼五穀等種 この部分を右に重複して引用した箇所では「如彼五声等種」としていたのに対して、ここでは『管絃音義』の該当箇所と同じく「如彼五穀等種」に作っている。

※春殖時名因 この部分を右に重複して引用した箇所では「春植時為因」としていたのに対して、ここでは『管絃音義』の該当箇所と同じく「春殖時名因」に作っている。

※まことの音の位に 底本・東北大本「まへとの」に作る。彦根本・京大本・静嘉堂本「まことの」に作る。国会図書館本「まへとの」に作るも「へ」の右に朱墨で「こ」の小字傍書あり。今「まことの」に従う。

※或記云 底本・国会図書館本・東北大本・藝大本「式記」に作る。彦根本・京大本・静嘉堂本「或記」に作る。『体源鈔』十ノ上の該当箇所には「或記云ク」とある。今「或記」に従う。

※臣ニ 国会図書館本「臣二」を朱墨で「臣ヲ」に修正している。

※雛 底本・国会図書館本・東北大本「雛」に作る。彦根本・京大本・静嘉堂本・藝大本「雛」に作る。『楽書要録』の該当箇所「雛」に作る。今「雛」に従う。

※□木（欠字） □の欠字部分は、『楽書要録』巻第五の該当部分に於いても元々□になっている。これについて趙玉卿氏は『楽書要録』研究（中央音楽学院出版社二〇〇四）に於いて「此脱字疑為「草」字」（86頁）としてここが「草木」であったと考えておられる。一方高瀬澄子氏は

『楽書要録』の研究』に於いて、西尾市岩瀬文庫所蔵抄本の上欄に「沼下恐闕嘉字」とあることを指摘しておられる（72頁）。

※其宜 藝大本「宜」字を欠く。

※熒惑 底本・国会図書館本・東北大本「熒」を異体字に作るも、今「熒惑」に改める。

※倉廩 藝大本「倉稟」に作る。

※辰星 底本・彦根本・京大本・国会図書館本・静嘉堂本・東北大本「辱星」に作る。藝大本「辰星」に作る。『楽書要録』の該当箇所「辰星」に作る。ここは「五星」の名であるはずなので今「辰星」に改める。

【注】

○御遊の時先呂遊ありて 底本「御遊の時先呂遊ありて：（中略）：其羽調に反音することなり」の部分、岩瀬文庫本は次のようにやや異なる本文となっている。

御遊の時先呂遊ありてかへり声になりて律遊是定れる事也。其本意ハ同均なるによりてぞ反音とハいふなり。其真実をいふときハ、双調呂のしらべハまづ中呂を宮として徴商角羽変宮変徴の七声を次第に立たり。是即中呂均なり。扱平調ハ中呂均の羽調は七声かわることなければなり。則初にハ宮調をしらべてその羽調に反音する也。

○これは同均なるのゆへなり 底本「これは同均なるのゆへ：（中略）：其羽調に反音することなり」の部分、静嘉堂本は次のようにやや異なる本文となっている。

是は其信実をいふときは、同均なるのゆへなり。双調と平調とハ同均にハあらざれども、呂の調は箏琵琶皆中呂を宮として七声を次第に立たり。是即中呂均なり。扱平調はもとより中呂均の羽調なり。これによりて七声かわることなし。則宮より羽に反音することなり。今の世人これを知らず。なげかしきことにこそ。

○夾鍾均の商調 同じ「双調」の名を冠する中国の宮調は「夾鍾均」の「商調式」即ち「夾鍾商」である。このことを示す資料は枚挙に暇ないが、理論上成立する八十四調全ての律呂名と俗名を併記しているものとしては、（南宋）張炎の詞論書『詞源』と（南宋）陳元靚の類書『事林広記』とが挙げられよう。前者はこの分野の重要書籍であるものの我が国江戸期にはほとんど知られていなかったのに対し、後者はいわゆる「元禄本」などの和刻本で広く参照されている。『詞源』巻上「十二律呂」の「夾鍾均」の項目に、

夾鍾商 俗名 双調

とあり、『事林広記』（元至順刻本、元禄十二年刻本）「楽星図譜」「律生八十四調」の「仲呂」の項目に、

呂名夾鍾商 俗呼双調

とある。

○今世箏弾法 底本「今世箏弾法むかしにかはりて：（中略）：便覧のため左に図したり」の部分、静嘉堂本は次のようにやや異なる本文となっている。

又近世は箏調めやうむかしにかわりて律は五声に調めたり。かたゞ本意を失へり。古譜を見て能考べし。此事よく知べくハ図左に注したり。

また同じ部分、岩瀬文庫本も次のようにやや異なる本文となっている。

今世吹物琵琶は此定なりしが、箏のみしらべやうむかしにかわりて五声に成にたり。かたがた其真のすじを人しらぬやうに成たり。笙・箏・篳篥・笛・琵琶などの反音の図これを注す。

岩瀬文庫本はこの後、底本・諸本とは異なる形式の音階の図表を載せているが、その内容は基本的に底本・諸本の図表をより詳しくしたものとなっている。次の「双調七声・平調七声」の注を参照。

○双調七声・平調七声 「双調」と「平調」が同均であることを示す図表である。これに七声に限らず十二律呂を全て補って図示するならば、次のようになる（日本の十二律呂名も添えた）。

平調		双調	
嬰商	双	仲	宮
	鳧	蕤	
角	黄	林	商
	鸞	夷	
徵	盤	南	角
	神	無	
羽	上	応	反徵
嬰羽	壺	黄	徵
	断	大	
宮	平	太	羽
	勝	夾	
商	下	姑	反宮

使用する音程が同じであること、即ち同均であることが分かる。また本文が述べるように「平調」は「中呂均の羽調」（即ち律調の主音「宮」が「太簇」にある）なので、「平調」が「宮」始まりになるよう「太簇」「夾鍾」「姑洗」を補って表示するならば、次のようになる。

双調 呂調		平調 律調		律呂(中)		律呂(日)	
呂宮 〓 宮		律嬰商 〓 嬰商		仲呂	双調		
呂商 〓 商		律角 〓 角		蕤賓	鳧鐘		
呂角 〓 角		律徵 〓 徵		林鍾	黃鐘		
呂反徵 〓 反徵		律羽 〓 羽		夷則	鸞鏡		
呂徵 〓 徵		律嬰羽 〓 嬰羽		南呂	盤涉		
呂羽 〓 羽				無射	神仙		
呂反宮 〓 反宮		律商 〓 宮		應鍾	上無		
		律宮 〓 宮		黃鍾	𪛗越		
				大呂	断金		
				太簇	平調		
				夾鍾	勝絶		
				姑洗	下無		

これにより岩瀬文庫本は、異なる形式の図を以て底本と同様の「反音」の説明を行っていることが分かる。
 ○如此同均也 底本「如此同均也：（中略）：反り音に叶へり」の部分、岩瀬文庫本はこれを欠き、諸本にない独自の音階の図表を示した後、次のような本文を置く。

私案、近來箏のしらべ五声に成てより、吹物も哥のふりまでも、聊かわりてぞ侍らん。これはすべて物の音は箏にハよく和することなれば、残樂なども箏を賞翫することぞかし。此七声のかけたるにより、笙、簫、篳篥も哥のこわぶりも、箏に和することを聞として、箏になき音ハおのづからき、わかぬやうに吹ことを習の様に成にたり。是ハ道にとりてかきんとや申べし。殿下鷹司殿此事の天下にかけたるを年ごろはいなくおぼしめされてつねに御沙汰あり。我も此事を嘆き侍りき。もとも琵琶にはなをむかしにかわらぬ声にしあれば、糸竹の道に七声の闕たるといふにもあらねど、箏にも此声の侍りてぞあることなれば、今一しほに糸竹の声の調和も諧て此道の真のすじに侍りと覺侍りぬ。

なお岩瀬文庫本文に見える「残樂」については、『山鳥秘要抄』安倍家原本目録の「智」の二に「残樂助音譜」とあるのに関連するか。

○全体双調は「全体双調は、反り音に叶へり」の部分に言う心は以下の如し。

・中国式の「双調」は「夾鍾均の商調式」（夾鍾商）である。

・実際に日本の楽曲で用いられる「反呂反律」は「夾鍾商」に相当する（3「半呂半律の調といふ事」に言う所の「律兼呂」に相当）。

十二律		仲	蕤	林	夷	南	無	応	黄	大	太	夾	姑
（中国）	夾鍾商	商		角		変徴	徴		羽		変宮	宮	
（日本）	半呂半律	宮		商		呂角	律角		徴		羽	嬰羽	
		中国で言う双調											
		律兼呂の半呂半律											

・しかし、日本の呂調は中国の宮調式に同じく、「中呂」を「宮」とするならば「中呂均の宮調式」（仲呂宮）である。（つまり、同じ「双調」という名称でも、中国の「夾鍾商」とは異なり、日本の「双調」は「中呂宮」である）

・よって、日本の「双調」（中呂宮）と「平調」（中呂羽）とは同均であり、同均に於いて反音が行われる。

十二律		仲	蕤	林	夷	南	無	応	黄	大	太	夾	姑
双調（中呂宮）	宮			商		角		変徴	徴		羽		変宮
平調（中呂羽）	嬰商			角		徴		羽	嬰羽		宮		商

○尙越調七声・盤渉調七声「尙越調」と「盤渉調」が同均であることを示す図表である。右注と同様に図示するならば、次のようになる。

使用する音程が同じであること、即ち同均であることが分かる。また本文が述べるように「盤渉調」は「黄鍾均の羽調」（即ち律調の主音「宮」が「南呂」にある）なので、「盤渉調」が「宮」始まりになるよう「南呂」「無射」「応鍾」を補って表示するならば、

				壹越調			
				宮	黄	十二律呂	十二律呂
				商	太	大	壹
					夾	勝	平
				角	姑	下	斷
					仲	雙	角
				反徵	蕤	鳧	羽
				徵	林	黄	嬰羽
					夷	鸞	
				羽	南	盤	宮
					無	神	
				反宮	応	上	商

				壹越調			
				宮	黄	十二律呂	十二律呂
				商	太	大	壹
					夾	勝	平
				角	姑	下	斷
					仲	雙	角
				反徵	蕤	鳧	羽
				徵	林	黄	嬰羽
					夷	鸞	
				羽	南	盤	宮
					無	神	
				反宮	応	上	商
					大	斷	

となる。これも西洋音楽に言う「平行調」の関係にあることが分かる。

○四ヶ法用 四箇法要に同じ。仏教の法要を構成する部分の名称で、「唄」^ば「散華」^{さんげ}「梵音」^{ぼんのん}「錫杖」^{しやくぢやう}の四曲を用いる。『日本音楽大事典』には、

仏教儀式の構成部分の名称「四箇法用」とも書く。「唄（如来唄）」「散華」「梵音」「錫杖」の四曲からなり、いずれも呉音読みによる。これは法会の導入部で唱えられ、心身を静肅にし、道場を清め、法会を莊嚴する（飾る）という意味を持つ。

とあり、また『邦楽百科辞典』には、

声明の用語。法要とは狭義には、法会の前半部分で心を静めて道場を清めたり莊嚴する意味で、旋律の豊かな声明曲を式衆が唱える部分をさす語である。四箇法要とは「唄」「散華」「梵音」「錫杖」の四曲を用いる法要という意味である。

家伝本『新撰筆策抄』八卷（国会図書館所蔵）には、本条で言及されている「宗明楽の内第六大鼓まへ平調音」に相当する記述は見出せない。212「第二本朝音曲楽曲のうへにて律音呂音と云事」条の「当家筆策抄」の注を参。

○声明用心集 湛智撰『声明用心集』上「三、和国神楽五声」二・一の「一、壹越条与盤食条更互变音」「沙陀調曲」に次のようにある。

安楽塩 一徳塩 洪河鳥「慈覺大師所伝曲云云」多兼羽調变音也。

また「三、壹越条与黄鐘条更互变音」「大食調」に次のようにある。

散手序「兼角徵兩調变音」 同破 大変楽急 還城楽 天人楽 傾坏楽急 蘇芳菲 拔頭 庶人三臺「已上兼徵調变音也」

但し書陵部蔵本（安倍季良抄本）は後者の葉を欠く。

○残夜抄 藤原孝道撰『残夜抄』伏見宮本の「七、調子のうつりかはりめ」に次のようにある。

七、調子のうつりかはりめといふは、まづしらべ一をしらめたるに、ことこゑのいできたる、なべてはわろし。それにわろからでよき有。これをかへりこゑといふ。これハ呂より律にかへる、律より呂につたふ。其こゑの位を能々心えつれば、いと調子にうつれども、やがてよし。

ふるき略頌に云、下一盤涉還双調、平大同音上黄鐘。又云、双調平調上黄鐘、下一盤涉還双調といふは、そう調より平調にかへり、平調より上无調にかへり、上无調より黄鐘調にかへり、黄鐘調より下无調にかへり、下无調より一こつ調にかへり、壹越調より盤涉調にかへる、盤涉調より双調にかへるべしとなり。これは笛一がうちの事にて、かたのごとくつゝけたれども、まとしき声の位はあはぬ也。この中に双調と平調とうつりよく、壹越調と盤涉調と又うつりよし。又黄鐘調と下无調とはよし。此外のかへりこゑはいといみじくなし。これらは十二律といふことをよくく心えてしるべき事也。これらまでは女房のこまかのさたにをよぶまじければ、くるしからず。

また同じ『残夜抄』群書類従本の「第七、調子のうつりかはりめ」には次のようにある。

第七、調子のうつりかはりめといふは、まづしらべ一をしらめたるに、こと声のいできたる、なべてはわろし。それにわろからでよきあり。是をかへりこゑといふ。是ハ呂より律にかへる、律より呂につたふ。其声の位をよくく心えつれば、こと調子にうつれども、やがてよし。ふるき略頌三云、下一盤涉還双調、平大同音上黄鐘。又云、双調平調上黄鐘、下一盤涉還双調といふは、双調より平調にかへり、平調より上无調にかへり、上无調より黄鐘調にかへり、黄鐘調より下无調にかへり、下无調より一越調にかへり、壹越調より盤涉調にかへり、盤涉調より双調にかへるべしとなり。これは笛一がうちの事にて、かたのごとくつゝけたれども、まことしき声の位はあはぬ也。此中に双調と平調とうつりよく、壹越調と盤涉調と又うつりよし。又黄鐘調と下无調とはよし。此外のかへりこゑはいといみじくなし。これらは十二律

といふことをよく心えてしるべき事也。これらまでは、女房のこまかのさたにをよぶまじければ、くはしからず。

○実兼公宰円僧都と 西園寺実兼記『音律事 西園寺殿与阿月問答之琴、西園寺殿与宰円問答律二変之事』の「西園寺殿与宰円問答律二変之事」に次のようにある。

宰円云、正徴正宮ニ一律隔タル物ヲ被号ニ変道理不当覚候。御流ハ、角変宮ト被仰候ハ、商羽ノ塩梅ニテコソ候へ。且件ノ両ノ声ハ、平調ニテハ塩梅ト被謂候カ。平調ノ商ノ塩梅ハ、双調ニテハ為正宮。平調商ハ、双調ノ為変宮。平調ノ塩梅ハ、双調ニテハ為正徴。平調ノ羽双調ニハ為変徴。如此候へバ、雖有平調双調差別可為一具。彼管声条ハ、可足准拠候歟。云云

予答云、此潤色誠有其謂。然而於律ノ五音者、正徴正宮ニ二律サガリタルヲ二変ト号ス。是当流之異儀也。所詮所用ノ声ニヲキテハ両方無差別。只名ノ付様ニ有説也。抑引双調平調之准拠被備潤色歟。然者、又当流ニモ聊可立申理有之。

○孝道朝臣并西園寺相国実兼公 右の注に見える藤原孝道撰『残夜抄』及び西園寺実兼記『音律事』を指す。

○管絃音義『管絃音義』に次のようにある。但し（一）内は『群書類従』本に記されている異文である。

管絃音義曰、夫返音者従先調子乙音一重高音以為調子甲音、從此甲音三重下音以為乙音。如此次第輪環、無始無終、无际无限、名為返音輪転也。仁王経曰、生老病死、輪転無際、即此義也。然亦所以名返音者、凡此七音、皆是自甲至乙、惣有四重音、是則一音中四時音也。四時者謂有情生老病死、世界生住異滅也。生住異滅者即春夏秋冬之四季也。故知甲者音始也。乙者音終也。謂生位音名甲、滅位音名乙也。而返音時、皆以前第三異位音^{（秋）}、為後第一生位甲音^{（春）}。如彼五穀等種、物雖雖一、秋熟位名果。春殖時名因。此七音如此、以先調子第三秋之果音、為次調子第一春之因音也。前果返為後果成因、故名返音也。是則五穀五行味、五音五行音。故其義相同也。故弘決六云、苟萌氣昇天為五雲、化為五龍、其音名五音云々。苟萌氣者、謂五穀初生氣也。同書云、穀始開牙名萌、豆等始開牙名苟云々。凡返音時越^{（一）}一音、故各於其間有一^{（二）}調子。此亦以返音次第輪転也。超越一音至次調子者、秋音返成春音、故逆越夏一音也。謂如平調音返上無調音時、從下至下^{（一）}。故越六一音也。余例之可知。

○以上取要注之 季良は本条に於いて『管絃音義』の本文を、一部省略しつつ、一部省略しつつ引用している。その「取要」の状況を、季良引くところのテキストと右の『管絃音義』本文とを比較しつつ確認するならば、次のようになる。

〔季良所引〕

夫返音者、名為返音輪転也。

或亦所以名返音者、故名返音也。

是則五声五行音、故其儀相同也。

凡返音時、余例之可知之。

返音輪転図

仁王経曰、即此義也。

或亦所以名返音者、故名返音也。

〔管絃音義〕

返音輪転図

返音略頌曰、是平調。

夫返音者、名為返音輪転也。

仁王経曰、即此義也。

然亦所以名返音者、故名返音也。

是則五穀五行味、故其義理相同也。

故弘決六云、豆等始開牙名苟云々。

凡返音時、余例之可知。

本条に季良の引く『管絃音義』は「或亦所以名返音者」から「故名返音也」までを重複して引用し、しかもその重複部分に於いて文字の異同、或いは省略の有無の違いが生じていることが分かる。またその他の部分にも文字の異同や省略がある。さらに「二音」を「二音」に、「二調子」を「二調子」にそれぞれ作っている箇所は、右の『群書類従』本の（ ）内の異文の方に従っているように見える。案するに、「返音輪転図」の説明には「二音」「二調子」の方が適切だと考えられる。季良の「取要」は、「返音」の説明のために意を以て行つた校訂を含むことが考えられよう。

○此説は 左の「返音輪転図」の注を参照。

○道理とにて「道理と似て」の意か。

○返音輪転図 『管絃音義』の「返音輪転図」は甲音と乙音に笛譜のみを記すが、季良引くところの「返音輪転図」はそれぞれの笛譜の右に笙譜を朱墨で加えている。これは笛譜が二つの音程を兼ねる部分を笙譜を以て補う意図があつたとも考えられる。そこで、季良引くところの「返音輪転図」の甲乙音の笛譜・笙譜及びそれに対応する十二律呂（日中の名称を並記）を、左右方向に展開して示すと左の表のようになる。

左の表に示した如く、「反音輪転図」に於ける「乙」の第一音は「徵」、第二音即ち「乙音」「重高音」は「羽」をそれぞれ常に指し、乙の第三音は呂調の場合に「変宮」、律調の場合に「嬰羽」をそれぞれ指すこととなる。但し、「下無調」「平調」「𪛗越調」に含まれる「丁」音は、季良

●平調								●双調					
笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)	笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)	笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)		
テ	凡	平調	太簇	五	下	下無	姑洗	上	十	双調	仲呂	宮	甲
六	凡	𪛗越	黄鍾	テ	乙	平調	太簇	五	下	下無	姑洗	嬰羽 もしくは 変宮	
丁	工	上無	応鍾	六	凡	𪛗越	黄鍾	テ	乙	平調	太簇		羽
中	一	盤渉	南呂	丁	工	上無	応鍾	六	凡	𪛗越	黄鍾	徴	
				下無調									

がこれに笙譜の「工」を付していることから分かるように、十二律呂の「応鍾＝上無」を示すと考えられる。もしこれが「無射＝神仙」を示すならば、「平調」の「乙音＝重高音」たる「丁」音が「返音」するところの「𪛗越調」の甲音、即ち「𪛗越調」の「宮音」（黄鍾＝𪛗越）と一致しないからである。以下「丁」は「応鍾＝上無」として示す。

				● 黄鐘調								● 上無調							
笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)	笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)	笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)	笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)	笛譜	笙譜	律呂 (日本)	律呂 (中国)
上	十	双調	仲呂	夕	乞	黄鐘	林鍾	中	一	盤涉	南呂	丁	工	上無	応鍾	六	凡	壹越	黄鐘
五	下	下無	姑洗	上	十	双調	仲呂	夕	乞	黄鐘	林鍾	中	一	盤涉	南呂	丁	工	上無	応鍾
テ	乙	平調	太簇	五	下	下無	姑洗	上	十	双調	仲呂	夕	乞	黄鐘	林鍾	中	一	盤涉	南呂
六	凡	壹越	黄鐘	テ	乙	平調	太簇	五	下	下無	姑洗	上	十	双調	仲呂	夕	乞	黄鐘	林鍾
双調								盤涉調								壹越調			

●盤涉調								●𪛗越調								●下無調			
笛譜	笙譜	律呂 （日本）	律呂 （中国）	笛譜	笙譜	律呂 （日本）	律呂 （中国）	笛譜	笙譜	律呂 （日本）	律呂 （中国）	笛譜	笙譜	律呂 （日本）	律呂 （中国）	笛譜	笙譜	律呂 （日本）	律呂 （中国）
中	一	盤涉	南呂	丁	工	上無	𪛗鍾	六	凡	𪛗越	黄鍾	テ	乙	平調	太簇	五	下	下無	姑洗
夕	乞	黄鍾	林鍾	中	一	盤涉	南呂	丁	工	上無	𪛗鍾	六	凡	𪛗越	黄鍾	テ	乙	平調	太簇
上	十	双調	仲呂	夕	乞	黄鍾	林鍾	中	一	盤涉	南呂	丁	工	上無	𪛗鍾	六	凡	𪛗越	黄鍾
五	下	下無	姑洗	上	十	双調	仲呂	夕	乞	黄鍾	林鍾	中	一	盤涉	南呂	丁	工	上無	𪛗鍾
				上無調								平調							

律呂 (中国)	律呂 (日本)	笛譜	笙譜
林鍾	黄鍾	夕	乞
仲呂	双調	上	十
姑洗	下無	五	下
太簇	平調	テ	乙
黄鍾調			

この内の「上無調」について、「返音輪転図」の通りだとすると「乙」音は「仲呂＝双調」「林鍾＝黄鍾」「南呂＝盤涉」の三音となる。しかし「宮」の「応鍾＝上無」に対してこのような三音を有する音階は考えにくい。またその「羽」（夷則＝鸞鏡）に発する朱墨曲線が結ぶ先の「黄鍾調」の「甲音＝宮」、即ち「林鍾＝黄鍾」とも合致しない。そこで仮に「上無調」が「律調」であるものとし、その「徵」（蕤賓＝鳧鐘）が臨時的に「仲呂＝双調」を、「羽」（夷則＝鸞鏡）が臨時的に「林鍾＝黄鍾」をそれぞれ示すものとすれば、「上無調」の「乙音＝重高音」（林鍾＝黄鍾）が次の「黄鍾調」の「宮」（林鍾＝黄鍾）と合致する。

上無調		律調		黄鍾調	
律調	律調	宮	商	嬰	角
林	夷	黄	鸞	盤	神
南	無				
応	上		宮		
黄	大	角	商		
太	夾	徵	嬰	○	
姑	姑	羽	角	○	
仲	双	嬰		○	
蕤	鳧		徵		
林	黄	宮			
夷	鸞		羽		
南	盤		嬰		
無	神				
応	上		宮		
↑○は輪転図の乙音					
↑律調の音程配置					
↑○は輪転図の乙音					
↑律調の音程配置					
↑律調の音程配置					

「一重高音」が黄鍾であって初めて黄鍾調の宮と合致する。

さらに、「黄鍾調」について、一般的に用いられる「黄鍾調」は「律調」であるが、本条にて季良の示す「黄鍾調」は右の「下無調」との対照表に見える如く「呂調」である。「律調」と「呂調」の「黄鍾調」を並記するならば次のようになる。いずれにせよ「乙音＝重高音」たる「羽」の音程は両者共通なので、次の「下無調」への返音には影響ない。

下無調		律調	
宮		壺	黄
		断	大
商		平	太
		勝	夾
角	宮	下	姑
		双	仲
変	商	鳧	蕤
徵	嬰	黄	林
		鸞	夷
羽	角	盤	南
		神	無
変	徵	上	応
宮		壺	黄
	羽	断	大
	嬰	平	太
		勝	夾
	宮	下	姑

↑ 呂調の音程配置

↑ ○は輪転図の乙音

↑ 律調の音程配置

↑ ○は輪転図の乙音

また「下無調」について、もしこれが律調であるとしても呂調であるとしても、その「羽」は「返音輪転図」の示す「乙音一重高音」即ち「黄鍾＝壺越」と合致しない。またその「羽」（夷則＝鸞鏡）に発する朱墨曲線が結ぶ先の「壺越調」の「甲音＝宮」、即ち「林鍾＝黄鍾」とも合致しない。そこで仮に「下無調」が「律調」であるものとし、その「羽」（大呂＝断金）が臨時的に「黄鍾＝壺越」を示すものとするれば、「下無調」の「乙音一重高音」（黄鍾＝壺越）が次の「壺越調」の「宮」（黄鍾＝壺越）と合致する。

黄鐘調		律調			
宮		宮		黄	林
				鸞	夷
商		商		盤	南
		嬰		神	無
角				上	応
		角		壺	黄
変				断	大
徵	○	徵	○	平	太
				勝	夾
羽	○	羽	○	下	姑
		嬰	○	双	仲
変	○			鳧	蕤
宮		宮		黄	林

↑ 呂調の音程配置

↑ ○は輪転図の乙音

↑ 律調の音程配置

↑ ○は輪転図の乙音

「羽」の音程は「律調」「呂調」共通

「一重高音」が林鍾であって初めて壺越調の宮と合致する。

右の考察を基に、「返音輪転図」の「乙音一重高音」と「甲音」とを結ぶ曲線（底本では朱墨）の音程を視覚化するため、「双調」「平調」「上無調」「黄鐘調」「下無調」「𪛗越調」「盤渉調」の音程配置を図示する。但し、十二律呂を敢えて三オクターブ分反復し、各調の音程が階段状に並ぶように配置した。「乙音一重高音＝羽」を臨時的に移動する箇所については「○」を以て示した。

双調	平調	上無調	黄鐘調	下無調	𪛗越調	盤渉調		
							盤	南
呂調	律調	律調	律調	律調	呂調	宮	神	無
						商	上	応
					宮	嬰	𪛗	黄
						角	断	太
					商		平	夾
				宮	角	徵	勝	姑
							下	仲
				商	嬰	羽	双	鳧
			宮		徵	嬰	鳧	蕤
				角		宮	黄	林
			商	嬰	羽		鸞	夷
					角	宮	盤	南
			宮	徵			神	無
				角	變	宮	上	応
			商	嬰	○		𪛗	黄
				徵	羽		断	太
			宮		嬰		平	夾
				角		宮	勝	姑
			商	○	羽		下	仲
				徵	嬰		双	鳧
			宮	○			鳧	蕤
				角		宮	黄	林
			商	羽			鸞	夷
				徵			盤	南
			宮	嬰			神	無
					羽	變	上	応
				宮	嬰	徵	𪛗	黄
							断	太
				宮	羽		平	夾
						變	勝	姑
						宮	下	仲
							双	

これにより、ある調の「乙音一重高音」が次の調の「宮」と合致していることが確認でき、このような二つの調の間で「返音」していることが分かる。

一方季良の引用する『管絃音義』の「夫返音者」のこの個所には、

従先調子乙音一重高音以為調子甲音、

従此甲音三重下音以為乙音。

とある。これを要するに、先の調子の「乙＝徵」の一つ上の音「羽」が次の調子の「甲＝宮」となっていること、そしてその「甲＝宮」より三つ下の音即ち「徵」がその調子の「乙」となることを言っている。このことを、例えば右の表の内の「双調」と「平調」について見るならば、次のようになる。

双調 先調子
平調

宮		平	太
		勝	夾
商		下	姑
嬰商	宮	双	仲
		鳧	蕤
角	商	黄	林
		鸞	夷
徵	角	盤	南
		神	無
羽	反徵	上	応
嬰羽	徵	壺	黄
		断	大
宮	羽	平	太
		勝	夾
	反宮	下	姑
	宮	双	仲

乙音 ← 乙音一重高音 ←

甲音三重下音 乙音 →

甲音 →

そしてその「乙 徵」の一つ上の音「羽」がさらに次の調子「上無調」の「甲 宮」となり、順次循環して行くわけである。

さらに、『管絃音義』に対して季良が加えた説明、即ち「此説は笛の穴より如_レ形_ヲつけたる説なり」の言うところを整理すると、次のようになる。

「テ五 上 下 中 下 六 此七音の中四ツを取」

テ	平	太
	勝	夾
五	下	姑
上	双	仲
	鳧	蕤
夕	黄	林
	鸞	夷
中	盤	南
	神	無
下	上	応
	壺	黄
六	断	大
テ	平	太

→ この四つを取って「甲」「乙」を定める。
→

「テ六 下 中 第一のテを甲とし、中を乙として
先初のテより第三の中の音に反音するなり」

テ	平	太
	勝	夾
五	下	姑
上	双	仲
	鳧	蕤
夕	黄	林
	鸞	夷
中	盤	南
	神	無
丁	上	応
	壺	黄
六	断	大
テ	平	太

← 第三の音「乙」

さらに次の調に移る際には「乙音一重高音「丁」がその次の調の「甲」となる。

→ 甲

以上のように、この「甲」から「乙」→「乙音一重高音」→「甲」の「返音」を、笛の指穴の位置で説明したものであると考えられる。

なお「返音（反音）」の詳細については、田代幸子著「『管絃音義』の音世界・楽理がつくる音のコスモロジー」、高瀬澄子著「『管絃音義』に見られる図について」、高瀬澄子著「『管絃音義』における「返音」を参照されたい。

○孝道朝臣も 右の注に見える藤原孝道撰『残夜抄』「七、調子のうつりかはりめ」を指す。

○体源鈔 豊原統秋撰『体源鈔』十ノ上に、次のようにある。

或記云ク、御遊ニ必双調ヲ用ラル、事ハ双調ハ是仁徳ナリ。君ノ恩ヲモテ彼徳ヲ嘆ル故也。

○統秋朝臣私云 豊原統秋撰『体源鈔』第十卷ノ上に、次のようにある。

私云、御遊ニ双調ヲカナラズ用勿論ナリ。又律ニハ平調ヲ用、然バ前ノ口伝ナラバ平調ハ臣ニツカサドル、仍君臣ノ徳ヲ奏ルナルベシ。是随分ノ口伝ナリ。

○楽書要録五音の本文を載たる文 『楽書要録』巻第五「楽譜」に、次のようにある。

宮為君、君音調則君道得、君道得則夫和妻柔、宮室制度、各得其宜、稼穡熟成、天下和平、四海冥服、鎮星修度、麒麟在郊「麒麟者土之精也」、聖人自来、宮乱則荒。

商為臣、商音調則臣道得、臣道得則節義廉直、謹身奉上、賞不違所讎、罰不阿所愛、不畏強禦、各濟其任、兵革不用、刑伐不作、太白修度、白虎在郊、商乱則陂。

角為人、角音調則人道得、人道得則君有惻隱之心、好生惡殺、不奪人時、同其憂樂、人有仁施之行而無爭奪之心、不隱山藪、競遊道芸、歲

星修度、和風順節、蒼龍在沼、□木並生、角乱則憂。

徴為事、徴音調則尊卑有別、貴賤有差、慈讓在心、長幼有節、事無稽遲必得其宜、榮惑修度、鳳凰來遊、徴乱則衰。

羽為物、羽音調則倉廩實貨賄通、四人安業、各獲其利、宗廟致敬、鬼神降祉、辰星修度、玄武來遊、羽乱則危。

なおテキストは高瀬澄子著『楽書要録』の研究』によった。

【参考文献】

- 『管絃音義』の音世界…楽理がつくる音のコスモロジー」田代幸子著（日本文学協会『日本文学』55巻6号二〇〇六）
- 『管絃音義』に見られる図について」高瀬澄子著（『ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』第13号二〇一〇）
- 『管絃音義』における「返音」高瀬澄子著（『ムーサ 沖縄県立芸術大学音楽学研究誌』第15号二〇一四）
- 『楽書要録』の研究」高瀬澄子著（コンテンツワークス BookPark 二〇〇七）
- 『楽書要録』研究」趙玉卿著（中央音楽学院出版社二〇〇四）
- 『新撰筆策抄』八巻（国会図書館蔵、200-214、安倍家伝本・抄本、マイクロフィルムによる）
- 『声明用心集』湛智撰（書陵部蔵、266-889、国文学研究資料館デジタル画像による）
- 『声明用心集』湛智撰（『統天台宗全書 法儀1 声明表白類聚』所収、天台宗典編纂所一九九九）
- 『残夜抄』藤原孝道撰、（『伏見宮旧蔵楽書集成 三』所収、宮内庁書陵部編図書寮叢刊、一九九八）
- 『残夜抄』藤原孝道撰、（『群書類従』第十九輯「管絃部」巻第三百四十七所収、続群書類従完成会一九五九）
- 『音律事 西園寺殿与阿月問答之琴、西園寺殿与幸田問答律二変之事』西園寺実兼記（『統天台宗全書 法儀1 声明表白類聚』所収、天台宗典編纂所、春秋社一九九九）
- 『管絃音義』（『群書類従』第十九輯「管絃部」巻第三百四十一所収、続群書類従完成会一九五九）
- 『管絃音義』（『古楽書遺珠』天理大学出版部、八木書店一九七四）
- 『体源鈔』全四冊 豊原統秋撰（復刻日本古典全集 現代思潮社一九七八）
- 『楽書要録』（『中国古代音楽文献集成』第2輯1所収、国家図書館出版社二〇一〇）
- 『楽書要録』（『佚存叢書』所収、『百部叢書集成』芸文印書館一九六五）

『楽書要録』(西尾市岩瀬文庫蔵、寛政十一年識、145-177)

『詞源疏証』蔡愼著(金陵大学中国文化研究所叢刊甲種、金陵大学中国文化研究所一九三二)

『詞源解箋』鄭孟津・吳平山著(浙江古籍出版社一九九〇)

『宋代の詞論』——張炎『詞源』詞源研究会編著(中国書店二〇〇四)

『新編纂図増類群書類要事林広記』(南宋)陳元靚撰、元至順刊本(中国史料系編『中国音楽史料』四)所收摺元順間刻本影印、鼎文書局一九七五、
後集「音譜類・樂星図譜・律生八十四調」

『纂図増新群書類要事林広記』(南宋)陳元靚撰、後至元六年刊本(『事林広記』中華書局一九九九、摺元至元六年刻本・元祿十二年刻本影印)

『新編群書類要事林広記』(南宋)陳元靚撰、元祿十二年刊本(『事林広記』中華書局一九九九、摺元至元六年刻本・元祿十二年刻本影印)(『和刻本
類書集成』所收摺元祿十二年刊本影印、汲古書院一九七六)戊集卷之九「樂星図譜・律生八十四調」

『日本音楽大事典』平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修(平凡社一九八九)

『邦楽百科辞典 邦楽から民謡まで』吉川英史監修(音楽之友社一九八四)

『西尾市岩瀬文庫所蔵江戸期抄本『呂律反音事』——翻刻と考察——拙著(『中京大学図書館学紀要』第39号二〇一八)

6 本朝呂律を陽陰と用ひ來說（第39葉表～第46葉裏）

私云、律ハ陽にて男にかたどり、呂ハ陰にて女にかたどる。是唐より伝來の法にて前に本文を載たり。六律六呂の儀也。またここに注す。

周礼云、黄鍾初九下生林鍾初六、林鍾又上生太簇九二、太簇又下生南呂六二、南呂又上生姑洗九三、姑洗又下生應鍾六三、應鍾又上生蕤賓九四、蕤賓又上生大呂六四、大呂又下生夷則九五、夷則又上生夾鍾六五、夾鍾又下生無射上九、無射又上生中呂上六、同位者象夫妻、異位者象母子。所謂律娶妻而呂生子者也。

私に云、これを左に図す。

上九 [*]	——	無。
九五	——	夷
九四	——	蕤
九三	——	姑
九二	——	太
初九	——	黄
上六	——	中
六五	——	夾
六四	——	大
六三	——	應
六二	——	南
初六	——	林

如此定たる事なり。しかるに本朝の文に載するところこれに異なり。其例。

糸竹口伝云、伊綱宇治殿へ参ラレタリケレバ、オリ
フシ七夕祭ノアリケルニ、御心ミバヤ、柱タテテ進ゼ
ヨトオホセアリケレバ、一張ハ呂ノコトデニ立、一張ハ
律ノコトデニ立タリ。呂ヲバ男ニカタドリ、律ヲバ
女ニナゾラフルユヘニ、カクタツル也。乞巧奠ノ調ト云
ニヤ、人ノ不知事也。」

源氏物語帚木懷より笛とり出て吹ならし、影

もよしなどつづしりうたふ程に、よくなる和琴を調

べと、のへたりける、うるハしくかき合せたりしほど、

けしうハあらずかし。りちの調ハ女のものやハらかに

かきならして、すのうちより聞へたるも、今めき

たる物のこゑなれば、

岷江入楚、陰陽と分ル。夏ハ春に属也。冬ハ秋につく也。

飛鳥井ハ律の哥也。呂は双調、律は平調也。律ハ秋をつ

かさどる。又律ハ陰なれば女の事也。時節神無月なれば」

折にあへる也。

若菜下源詞春のおぼる月夜よ、秋の哀はた、かうやう

なる物のねに、虫の声より合せたる、ただならず、こよ

なく響そふ心ちすかし、との給へば、夕詞大将の君、秋の

夜のくまなき月には、万の物のとどこほりなきに、

ことのねもあきらかに、すめる心ちはし侍れど、猶こと

さらにつくり合せたるやうなる空の気色、花の

露もいろく目うつろひ心ちりて、限こそ侍れ。春
の空のたどたどしき霞の間より、おぼろなる月」

かげに、しづかに吹合せたるやうにハ、いかでか。笛のねな

ども、えんにすみのほりはてずなん。女は春をあは

れむと、ふるき人のいひおき侍りける、げにさなん

侍りける。なつかしく物のととのふる事ハ、春の夕暮

こそことに侍りけれと申給へば、源詞いな、このさだめよ。

いにしへより人のわきかねたることを、すゑの世にく

だれる人の、えあきらめはつまじくこそ。物のしら

べ、ごくの物どもはしも、げにりちをばつぎの物に

したるは、さもありかし、などの給ひて、」

岷江入楚云、呂ハ春のしらべ、律は秋のしらべ也。

本ハ律呂と云。律ハ陽、正也。呂ハ陰、助也。然れども

呂律といひて律を次とする也。

秘 ごくの物曲也。日本ハ呂律を陰陽と用來也。唐二ハ

律呂といふ。律を先にする。

弄 りちをばつぎの物にとハ、春をまされりと源氏の

給ふ也。問、もののしらべごくの物どもハしも、りち

をばつぎの物にしたる、調曲を催馬楽のもちいのごと

く、呂律と律を次にとかける也。」

一勸 催馬楽を呂律と申つけ侍り。問、本朝の伶倫

の相伝、呂律を陽陰と用來云々、催馬楽も此

分なるをや。一勸 唐二ハ律呂といふ。陽をさきとする

也。文明唐子問答。以上一勘。

大神基政撰龍鳴抄云、五音といふハさきにいひつる^{*}いつのこゑなり。六てうしといふことあり。いはゆる大食調をくハへたる也。こゑハ平調におなじなれども、呂律のたがふなり。平調ハ律なり。大食調は呂なり。』律のこゑ三、平調、盤渉調、黄鍾調なり。呂三、𪛗越調、双調、太食調なり。ある管絃者これをうたがう。平調の声にてあるに、かけたることやハある。なにのゆへに太食調をワけたるぞといふ。先達こたう。一に律のこゑ三、呂のこゑ二あらば、陰陽の儀たがふべし。そのゆへに呂三大切なり。又平調ハ管絃^{*}なかの本体のこゑなり。よくくひろくはかりもなし。これハ本文にいふ法花涅槃^{*}也。心ハおなじけれども両部にわかれたり。又絃類^{*}たしかにたゞされたり。心うべきこと。物をそむるに、はなハあをけれど、した染にしたがひていろかハる。くれなひのうゑにハふたい^{*}になり、きハだのうゑにハもゑぎになる。おなじ花なれどもかやうにかはる。それを心うべし。呂といふこゑハおとこのこゑなりといふなり。律のこゑといふハ女^{*}のこゑなり。陰陽又これをなじ。文武といふも、天地といひ、おもて^{*}うちといふ、上下といふ、皆これなり。』

以上相違之事、律呂の本源をしらざれば
不審あるべし。但まへに注したる律
呂の名儀両様あるを覚悟するときは聊
不審なし。其真実ハ同じ理なり。子
細これを注。

六律六呂にて云ハ 律陽 呂陰

音曲楽曲の律呂にて云ハ 呂陽 律陰

此儀いかになれば、本朝にて呂音と云し
らべは是宮調のしらべなり。宮より反徴
に至るまで、七声を次第に相生す。此ゆへに名ハ呂と
云とも是を陽とす。〔勿論宮ハ陽也〕

律は此呂の七声の内の羽調を律のしら
べと云。此ゆへに名は律と云とも、これを陰と
す。〔勿論羽ハ陰也〕

七双 ^〇 声調	七 ^〇 越 越調 声
宮 中呂	宮 黄鍾
商 林鍾	商 太簇
角 南呂	角 姑洗
反徴 応鍾	反徴 蕤賓
徴 黄鍾	徴 林鍾
羽 [*] 平調 太簇	羽 [*] 盤渉調 南呂
反宮 姑洗	反宮 応鍾

以上則前に注したる反音の儀に同

じ。同均なるのゆへなり。宮調を陽とし、羽調を陰とす。

黄鍾調は無射均の羽調なり。これに准じて知るべし。

又案に、御遊^{○*}には往古より多くハ双調を用ひらる。中呂ハ四月、是陰呂の月なればこれを呂とし、太簇は正月、是陽律の月なればこれ律とす。これよりすべて商調を呂、羽調を律と云習したる事に成たる歟。おぼつかなし。猶後の明鑑をまつものなり。

徒然草云、横川の行宣法印が申侍しは、唐土は呂の国也。律の音なし。和国は单律の国にて呂の音なしと申き。

私云、本朝の人の声ハ此律のしらべによく相応したり。あやしの田夫山がつのうたへる哥も自然と此律音にハ聞へける、」定て天地の自然の理にかなひたる事なるべし。

又教訓抄云

呂ト云男音律ト云ハ女声也。

又云鳳ハ雄也「鳴律音」。風ハ雌也「鳴呂音」。或令呂ハ女声ト云如何可尋。

又体源抄云

呂律事、呂ハ和ゲル楽ヲ以テシ、律ハ平ゲル声ヲ以ス。

文選註云、黃帝伶倫氏命ジテ大夏西崑崙」

山ノ陰ニシテ解谷ノ竹ヲ取、鳳管ヲ造ル。雄雌二ノ

声ヲモテ律呂トス。呂ハ呂音也。^{ナマル}律ハ律音也。^{スメル}鳳ハ

呂ニ鳴。鳳ハ律音ニ鳴。或云、呂ハ鳳、律ハ鳳ト云。両説

相違ナリ。但雄声ヲ律トシ、雌声ヲ呂トス。六律

六呂合十二管也。「中略」又云、呂ハ男音也。律ハ女

声也。此両説相違也。私云、鳳ハ呂也。鳳ハ律尤

也。仍鳴音ノ鳳ハ律、鳳ハ呂ナルハ恋テ鳴心也。

右二つの文ハ両説をまじへ注したり。見る人

彼両説を覚悟してこれを見るべし。

【校記】

※本朝呂律を陽陰と用ひ来説 本条題目、巻頭目録は「本朝の書呂律を陽陰と用ひ来る説」と記す。

※下生 底本・彦根本・京大本・国会図書館本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「生下」に作る。今「下生」に改める。211「第一六律六呂之事」の校記、及び朱墨部「周礼云」注を参照。

※上九ノ初六 藝大本、易の卦の爻の左の行（「上九」から「初六」まで）を欠く。

※宇治殿 国会図書館本「宇治殿」の右に朱墨で「頼通」の小字傍書あり。『群書類従』本『糸竹口伝』にも同様の傍書あり。

※ミバヤ 国会図書館本「ミバヤ」の「ヤ」の右下に朱墨で「ト」の小字傍書あり。『糸竹口伝』の該当箇所、「ミバヤト」に作る。

※呂ヲバ 藝大本「呂ヲバ」を「呂ハ」に作る。『糸竹口伝』の該当箇所「呂ヲバ」に作る。

※律ヲバ 藝大本「律ヲバ」を「律ハ」に作る。『糸竹口伝』の該当箇所「律ヲバ」に作る。

※懷より 『源氏物語』 古典文学全集・古典集成・古典文学大系の該当箇所、「懷なりける」に作る。

※影もよし 藝大本「影」の字を欠き、その場所が一字分空白となっている。

※うたふ 国会図書館本変体仮名の「かたふ」に作り、「か」の右に朱墨で「う」の小字傍書あり。

※かきならして 藝大本「かきならして」と「すのうち」の間に「、」とあり。

※飛鳥井 彦根本・京大本「飛」の右上に「本」の小字傍書あり。藝大本「本飛鳥井」に作る。

※かうやうなる 底本・国会図書館本「か○や○なる」の部分がやや判読し難いが、朱墨の見せ消ちで「かうやうなる」に修正されている。彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「かうやうなる」に作る。『源氏物語』古典文学全集・古典文学大系「かうやうなる」に作る。今「かうやうなる」に従う。底本、この第41葉表以降に朱墨小字傍書もしくは見せ消ちによる誤字の訂正が見られる。

※心ちすかし 底本・国会図書館本「心すかし」に作るも、「心」の右下に朱墨で「ち」の小字傍書あり。彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「心すかし」に作る。『源氏物語』古典文学全集・古典集成・古典文学大系それぞれ「心地すかし」「心ちすかし」「ここちすかし」に作る。今「心ちすかし」に従う。

※ことのねも 底本・諸本「ことのねも」に作る。『源氏物語』古典文学全集・古典集成・古典文学大系それぞれ「琴笛の音」に作る。

※心ちりて 底本・国会図書館本「心ち○て」の部分がやや判読し難いが、朱墨で「り」の小字傍書あり。彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「心ちりて」に作る。『源氏物語』の該当箇所、「心散りて」に作る。

※限こそ 底本・国会図書館本「限しそ」に作るも、「し」の右に朱墨で「こ」の小字傍書あり。彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「限こそ」に作る。『源氏物語』の該当箇所、「限りこそ」に作る。

※いひおき侍りける 底本「いひをき」に作るも、「を」の右に朱墨で「お」の小字傍書あり。彦根本・京大本・国会図書館本・静嘉堂本・東北大本「いひをき」に作る。藝大本「いひおき」に作る。

※ことに侍りけれ 底本・国会図書館本「ことす」(すⅡ須)に作るも、「す」の右に朱墨で「に」の見せ消ちあり。彦根本・京大本・東北大本「ことす」(すⅡ須)に作る。静嘉堂本・藝大本「ことに」に作る。今「ことに」に改める。

※物のしらべ 底本・国会図書館本「しうめ」に作るも、「う」の右に朱墨で「ら」の小字傍書あり。彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「しらべ」に作る。東北大本「しうべ」に作る。

※つぎの物にしたるはさもありかし 藝大本「つぎの物に、、ありかし」に作る。

※呂ハ 彦根本・京大本・静嘉堂本・藝大本「呂」の右上に「阿」の注記あり。

※かける也 国会図書館本・藝大本「かけるなり」に作る。『岷江入楚』の該当箇所、「かけるにや」に作る。

※さきにいひつるいつつの 底本・彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本「さきにいひいつつのこゑ」に作る。国会図書館本「さきにいひいつつのこゑ」に作るも、「ひ」と「い」の右を漆喰状の白で一旦塗りつぶし、その上に朱墨の小字で「つる」と傍書している。藝大本「さきにいひいつつのこゑ」に作る。『龍鳴抄』の該当箇所、各本「先に（或いは「さきに」）いひつるいつつのこゑ」に作る。今「さきにいひつるいつつのこゑ」に改める。

※ワけたるぞ 底本・彦根本・東北大本「ワセ（世）たるぞ」に作る。京大本・静嘉堂本「ワけ（遣）たるぞ」に作る。国会図書館本「ワせ（世）たるぞ」に作るも、「せ」の右に朱墨で「け（希）」の見せ消しあり（カッコ内はそれぞれ変体仮名を示す）。藝大本「わけたるぞ」に作る。今「ワけたるぞ」に従う。

※管絃なかの 底本・彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「管絃なかの」に作る。国会図書館本「なかの」に作るも「なか」の右に朱墨で「中」の小字傍書あり。『龍鳴抄』該当箇所、書陵部266-799・書陵部266-888・狩野文庫5-16885-1「管絃なかの」に作る。『群書類従』本・狩野文庫5-16886-1「管絃中の」に作る。

※法花涅槃也。心ハ 底本・彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本「法花涅槃也」に作る。藝大本「法華涅槃等也」に作る。『龍鳴抄』該当箇所、『群書類従』本・狩野文庫5-16886-1「法華涅槃心ハ」に作る。書陵部266-799・書陵部266-888・狩野文庫5-16885-1「法花涅槃也。心ハ」に作る。

※ふたいになり 底本・彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本・藝大本「ふたいになり」に作る。『龍鳴抄』該当箇所、『群書類従』本・狩野文庫5-16886-1「ふたあいになる」に作る。書陵部266-799・書陵部266-888・狩野文庫5-16885-1「ふたいになる」に作る。

※こゑなりといふなり 底本・彦根本・京大本・静嘉堂本・東北大本「こゑなりといふなり」に作る。藝大本「聲也といふ也」に作る。『龍鳴抄』該当箇所、『群書類従』本・狩野文庫5-16886-1「こゑなり」に作る。書陵部266-799・書陵部266-888・狩野文庫5-16885-1「こゑなりといふなり」に作る。

※おもてうち 底本・彦根本・京大本・東北大本「おもてうち」に作る。国会図書館本「おもてうち」に作るも「ち」の右に朱墨で「ら」の小字傍書あり。静嘉堂本・藝大本「おもてうら」に作る。『龍鳴抄』の該当箇所、各本「おもてうら」に作る。

※覚悟するときは 底本・東北大本「覚悟するときは」に作る。彦根本・京大本・藝大本「覚悟するときは」に作る。国会図書館本「覚悟するときは」に作るも、「を」の右に朱墨で「と」の見せ消しあり。今「するときは」に従う。

※同じ理なり 国会図書館本「おなし」に作り、「し」の右に朱墨で「理也」の小字傍書あり。

※勿論宮ハ陽也 国会図書館本ここを小字注とせず本文と同じ大きさで記す。

※勿論羽ハ陰也 国会図書館本ここを小字注とせず本文と同じ大きさで記す。

※羽 盤涉調 藝大本この朱墨の「盤涉調」を欠き、墨の「羽」のみ記す。

※羽 平調 藝大本この朱墨の「平調」を欠き、墨の「羽」のみ記す。

※御遊には 国会図書館本「御遊とハ」に作る。

※或令 彦根本・京大本・東北大本・藝大本「或令」に作る。国会図書館本「或令」に作るも「令」の右に朱墨で「今」の小字傍書あり。静嘉堂本「或人云」に作る。『教訓抄』の該当箇所は「或人云」に作る。この「人云」を誤って合わせて「令」字と書いたものか。

※呂ハ呂音也 京大本「呂」の傍書「ナマル」を欠く。

※律ハ律音也 静嘉堂本「律」の傍書「スメル」を欠く。

【注】

○前に本文を載せたり 2-1「第一六律六呂之事」条末尾の朱墨部分（第17葉裏）を指す。

○周礼云『周礼』の該当部分は2-1「第一六律六呂之事」条末尾の朱墨部分と同じく、「春官宗伯」「大師」の「大師掌六律六同以合陰陽之声」の鄭玄注。但し、いわゆる阮元本を含む多くの伝本と季良の引用には異同がある。具体的には、阮元本等の「蕤賓又下生大呂之六四」から「夾鍾又上生無射之上九」に至る部分の「下生」と「上生」が、季良の引用では逆になっている。

これについて、阮元の校勘記は、

夾鍾又上生無射之上九、大呂又上生夷則之九五、夷則又下生夾鍾之六五、夾鍾又上生無射之上九。閏、監、毛本同、誤也。余本、岳本、嘉靖本下生皆作上生、上生皆作下生、当拠以訂正。盧文昭曰、礼記月令正義、春秋昭二十年正義、引此注皆不誤。

と述べる。さらに、例えば新文豊出版の中華叢書『分段標点十三経注疏』所収『周礼注疏』（以下分段標点本と言う）は阮元の校勘記を載せつつも鄭注本文は阮元本のままとする一方、北京大学出版社の『十三経注疏整理本』所収『周礼注疏』（以下整理本と言う）は阮元の校勘記に基づき鄭注本文を改めている。季良の引用は整理本の方に一致している。これを要するに、

阮元本・分段標点本等

季良所引・整理本等

其相生則以陰陽六体為之。

其相生則以陰陽六体為之。

黄鍾初九也。下生林鍾之初六

黄鍾初九下生林鍾初六

林鍾又上生大簇之九二

林鍾又上生大簇九二

大簇又下生南呂之六二

大簇又下生南呂六二

南呂又上生姑洗之九三

南呂又上生姑洗九三

姑洗又下生應鍾之六三

姑洗又下生應鍾六三

應鍾又上生蕤賓之九四

應鍾又上生蕤賓九四

蕤賓又下生大呂之六四

蕤賓又上生大呂六四

大呂又上生夷則之九五

大呂又下生夷則九五

夷則又下生夾鍾之六五

夷則又上生夾鍾六五

夾鍾又上生無射之上九

夾鍾又下生無射上九

無射又上生中呂之上六

無射又上生中呂上六

となる（傍線部が異同箇所）。阮元本『周易注疏』所載の清の陸宗楷「考証」には、

臣宗楷 按此四句、朱子鍾律篇引之、上生下生皆互易。蓋康成之法以陽生陰為下生、陰生陽為上生。但至蕤賓下生、則大呂之律短而以下皆遞

短。朱子所以易之與。

とある（康成は鄭玄の字）。つまり、「蕤賓」から下生によって生成した「大呂」は本来の「大呂」より短く（二分の一に）なり、それ以下の律呂も同様に短く（二分の一に）なる。よって（八度内で三分損益を行うために）朱子は訂正を行ったのだらう、ということである。

案ずるに、「蕤賓↓大呂」で「下生」（三分損一）を行わずに「上生」（三分益二）を行えば、「大呂」以下を八度（オクターブ）内で順次生成することができる。通常の三分損益はこの形で行われる。一方、今仮に阮元本を含めた諸本の『周礼』鄭玄注が旋宮図の方式で三分損益を単純に繰り返す方式を採用していたとするならば、最後の「無射又上生、中呂之上六」は「下生」となっていてしかるべきである。このことは、鄭玄

注は本来旋宮図の方式を意図したものではなく、通常の三分損益を記述していたことを想像せしめる。阮元本等従来のテキストでは単に、「蕤賓」から「無射」に至る部分で「上生」と「下生」に混乱が生じていたと考えるべきであり、従って校訂としては整理本の方が妥当だと言うことができる。

季良の引用は、まさに校訂を経た整理本のテキストと一致しており、正しい形の引用であると言える。従来主に用いられていた阮元本のようなテキストを音律に通じた季良が自ら修正して引用したのか、それとも当時既に正しく記述されたテキストがあつて季良がそれを参照したのか、といった事情については未詳である。

○無夷↘南林、上九↗初六易の乾の卦（乾下乾上）と坤の卦（坤下坤上）のそれぞれの爻に、対応する十二律呂を添えた図。これは、この右に引く『周礼』鄭玄注を季良が図示したものだと考えられる。季良引く鄭玄注は、

黄鍾初九也。下生林鍾初六、

林鍾又上生太簇九二

太簇又下生南呂六二

南呂又上生姑洗九三

姑洗又下生應鍾六三

應鍾又上生蕤賓九四

蕤賓又上生大呂六四

大呂又下生夷則九五

夷則又上生夾鍾六五

夾鍾又下生無射上九

無射又上生中呂上六

であり、これを整理すると、

黄鍾⇐初九

林鍾⇐初六

太簇⇐九二

南呂⇐六二

姑洗⇐九三

應鍾⇐六三

蕤賓 〓 九四 大呂 〓 六四
夷則 〓 九五 夾鍾 〓 六五
無射 〓 上九 中呂 〓 上六

となる。乾の卦(䷀)の初九から上九の爻にこれに対応させると、

無射 夷則 蕤賓 姑洗 太簇 黄鍾
← ← ← ← ← ←
上九 九五 九四 九三 九二 初九

となり、同様に坤の卦(䷁)の初六から上六にこれに対応させると、

中呂 夾鍾 大呂 応鍾 南呂 林鍾
← ← ← ← ← ←
上六 六五 六四 六三 六二 初六

となる。

なお易の卦では、一番下の爻を「初」と呼び、上に向かって順に「二」「三」「四」「五」、一番上の爻を「上」と呼ぶ。また陽を表す爻「―」を「陽爻」「剛爻」と言い、奇数の代表たる「九」を以て示す。同様に陰を表す爻「--」を「陰爻」「柔爻」と言い、偶数の代表たる「六」を以て示す。例えばここで言う「黄鍾初九」は、陽律たる黄鍾が乾の卦(䷀)の一番下(「初」)の陽爻(「九」)に相当することを、また「林鍾初六」は、陰呂たる林鍾が坤の卦(䷁)の一番下(「初」)の陰爻(「六」)に相当することをそれぞれ言う。また例えば「姑洗九三」は、陽律たる姑洗が乾の卦(䷀)の下から三番目(「三」)の陽爻(「九」)に相当することを、「応鍾六三」は陰呂たる応鍾が坤の卦(䷁)の下から三番目(「三」)の陰爻(「六」)に相当することをそれぞれ言う。

○糸竹口伝云 俊鏡撰『糸竹口伝』に次のようにある。

伊綱宇治殿^{源通}へ参ラレタリケレバ、オリフシ七夕祭ノアリケルニ、御心ミバヤト、柱タテ、進ゼヨトオホセアリケレバ、一張ハ呂ノコトヂニ
タテ、一張ハ律ノコトヂニ立タリ。呂ヲバオトコニカタドリ、律ヲバ女ニナゾラフ。コノユヘニカクタツル也。乞巧奠ノ調ト云ニヤ、人ノ
不知事也。

○源氏物語^{帚木} 『源氏物語』「帚木」に、次のようにある（小学館新編日本古典文学全集によった）。

懷なりける笛とり出でて吹き鳴らし、影もよしなどつしりうたふほどに、よく鳴る和琴を調べとのへたりける、うるはしく掻きあはせ
たりしほど、けしうはあらずかし。律の調べは、女のものやはらかに掻き鳴らして、簾の内より聞こえたるも、いまめきたる物の声なれば、
清く澄める月にをりつきなからず。

○岷江入楚 中院通勝撰『岷江入楚』二「帚木」の「律のしらべ女の」の項に、次のようにある（『源氏物語古注集成』本を底本とし、『源氏物語
古註釈叢刊』本により異同を補った）。

^花飛鳥井は律の哥也。呂は双調、律は平調也。

^秘律は秋をつかさどる。又律は陰なれば女の事（方）也。

^{（首注）}陰陽ト分ルニ夏ハ春ニ属也。冬ハ秋ニツク也。

時節神無月なれば折にあへる也。箋弄等同之。

○若菜下 『源氏物語』「若菜下」に、次のようにある（小学館新編日本古典文学全集によった）。

「心もとなしや、春の朧月夜よ。秋のあはれ、はた、かうやうなる物の音に、虫の声よりあはせたる、ただならず、こよなく響きそふ心地す
かし」とのたまへば、大将の君、「秋の夜の隈なき月には、よろづのものとどこほりなきに、琴笛の音も明らかに、澄める心地はしはべれ
ど、なほことさらにつくりあはせたるやうなる空のけしき、花の露もいろいろ目移ろひ心散りて、限りこそ待れ。春の空のたどどしき霞
の間より、朧なる月影に、静かに吹き合はせたるやうには、いかでか。笛の音なども、艶に澄みのぼりはてずなむ。女は春をあはれぶと古
き人の言ひおきはべりける、げにさなむはべりける。なつかしくものとのとのはることは、春の夕暮こそことにはべりけれ」と申したまへ
ば、「いな、この定めよ。いにしへより人の分きかねたることを、末の世に下れる人のえ明らめはつまじくこそ。物の調べ、曲のものどもは
しも、げに律をば次のものにしたるは、さもありかし」などのたまひて、

○岷江入楚 『岷江入楚』卅五「若菜下」の「ごくの物どもはしも、げにりちをばつぎのものにしたる」の項に、次のようにある（『源氏物語古注
集成』本を底本とし、『源氏物語古註釈叢刊』本により異同を補った）。

河曲、呂は春のしらべ、律は秋のしらべといふ歟。

花本は律呂と云。律は陽正也、呂は陰助也。然ども催馬楽には呂律といひて律を次にする也。

必^ここの物曲也。日本は呂律を陰陽と用來也。唐二ハ律呂と云。陽をさきにする也。弄^弄りちをばつぎの物にとは、春をまされりと源氏の給ふ也。

問云、もゝのしらべごくの物どもはしも、りちをばつぎの物にしたる、曲調を催馬楽のもちいのごとく、呂律と律を次にとかけるにや。一勘催馬楽二ハ呂律と申つけ侍り。

問、本朝の伶倫の相伝も呂律を陽陰と用來云々、催馬楽も此分なるをや。^{一勘}唐二ハ律呂と云（い）陽をさきにする也。文明^度唐子問答以上。一勘ノ一帖至^{若菜}下此所。

○伶倫 2-1「第一六律六呂之事」の「樂書要録」の注を参照。

○龍鳴抄 大神基政撰『龍鳴抄』上に次のようにある。

又五音といふは、先にいひつるいつゝのこゑなり。六てうしといふことあり。いはゆる大食調をくはへたる也。声は平調におなじなれども、呂律のたがふなり。平調は律なり。大食調は呂なり。律の声三、平調、ばんじきてう、わうじき調なり。呂三、一こつてう、そう調、大じきてうなり。ある管絃者これをうたがふ。平調の声にてあるに、かけたることやはある。なにの故に大じきてうをわけたるぞといふ。先達答う。一には、律の声三、呂の声二あらば、陰陽の義たがふべし。その故に呂三大切なり。又平調ハ管絃中の本体のこゑ也。よくくひろくはかりもなし。これは本文にいふ法華涅槃心ハおなじけれども、両部にわかれたり。又絃類たしかにたゞされたり。心うべきこと。物をそむるに、はなはあをけれども、したぞめにしたがいていろかはる。くれなゐのうゑにはふたあいになる。きハだのうゑにハもゑぎになる。おなじ花なれどもかやうにかはる。それを心うべし。呂といふ声はおとこのこゑなり。律のこゑといふは女のこゑなり。陰陽又これをなじ。文武といふも、天地といひ、おもてうらといふ、上下といふ、みなこれなり。

この「又呉音といふはゝその故に呂三大切なり」について、遠藤徹氏は『雅樂を知る事典』第三章「理論と思想」8「陰陽五行説との結合」（二）「呂律と陰陽」に於いて次のように解説しておられる。

少しことばを補って解釈すると、六調子とは五行に対応している五つの調子（双調、黄鐘調、平調、盤渉調、壹越調）に太食調を加えたものであり、太食調は、主音は平調と同じであるが、呂律が異なっている。平調は律、太食調は呂である。それで律の声は、平調、盤渉調、黄鐘調の三調子、呂も壹越調、双調、太食調の三調子となり調和がとれるのである。ある管絃者が五行と調子の対応は、平調のみで十分で

あるのに、なぜ太食調が別にあるのかと疑うが、先達が答えるには、律の聲が三、呂の聲が二であれば、陰陽の義にそぐわない。だから呂に三調子があるのが大切なのである、と。

陰陽五行との整合性のためのこじつけの嫌いもなくはないが、ともあれこのようにして陰陽五行説と六調子は安定した対応となるのである。(p.181)

○律呂の名義両様 2「律呂名義両様に覚悟すべき事」の2-1「第一六律六呂之事」及び2-2「第二本朝音曲楽曲のうへにて律音呂音と云事」を参照。

○宮より反徴に至る この後に「七声を次第に相生す」とあるように、「宮より反徴に至る」は「宮↓徴↓商↓羽↓角↓変宮↓変徴」という三分損益の生成順を言う。

○壹越調七声 右の「本朝にてこれを陰とす」「勿論羽は陰也」の内容を説明するための図である。「壹越調（黄鍾宮）」とその羽調式たる「盤涉調（黄鍾羽）」の音程配置は次のようになる。

壹越調			盤涉調		
黄	大	太	夾	姑	仲
商	角	徵	羽	嬰羽	夷
宮	商	角	反徴	徴	南
嬰商	角	徴	羽	宮	無
黄	太	夾	姑	仲	蕤
林	夷	南	無	応	黄
呂調⇕宮調式			律調⇕羽調式		

五声の宮は陽である。 →

宮調式の羽⇕律調の宮は陰である。 →

両者は同均である。日本の「律調」は中国の「羽調式」に等しい。そして「宮調式⇕呂調」たる「壹越調」の「宮⇕黄鍾」は陽である。一方その「羽調式⇕律調」たる「盤涉調」の「宮⇕南呂」は陰である。よって、日本での名称は「律調」であつても陰陽では「陰」となる、と季良は説いている。

○双調七声 右の「壹越調」と同様に、「双調」とその羽調式たる「平調」の音程配置は次のようになる。

「宮調式＝呂調」たる「双調」の「宮＝黄鍾」は「陽」である。一方その「羽調式＝律調」たる「平調」の「宮＝南呂」は「陰」である。よつて「律調」であつても陰陽では「陰」となる。

この「壹越調」「盤渉調」と「双調」「平調」の例を踏まえた上で、季良はこの続きに「同均のゆへ」「宮調を陽とし」「羽調を陰とす」と述べている。

○黄鍾調は無射均の羽調なり「無射均の羽調式」たる「黄鍾調」も右と同様に「陰」であることを述べている。7「唐燕楽二十八調略図」によれば「無射均の宮調式」は「黄鍾宮」なので、これを「黄鍾調」と並置すれば、

五声の宮は陽である。	→	黄鍾調		
		嬰商	宮	無
				応
		角	商	黄
				大
		徵	角	太
				夾
		羽	反徵	姑
		嬰羽	徵	中
				蕤
宮調式の羽＝律調の宮は陰である。	→	呂調＝宮調式		
		宮	羽	林
				夷
		商	反宮	南
		嬰商	宮	応
		律調＝羽調式		

となる。同様に「黄鐘調」は「律調」であつても「陰」である。

○御遊には往古より多く双調をここに言う「御遊には双調を用いる」「中呂は四月で陰呂」「太簇は正月で陽律」「商調を呂、羽調を律とする」と

の内容を、「中呂均」の「呂調」たる「双調」と、同均で「律調」たる「平調」を以て図示すると次のようになる。

陽	黄	太	夾	姑	中	蕤	林	夷	南	無	応
陰	徵	羽		反宮	宮		商	角	徵		反徵
陽	嬰羽		宮	商	嬰商		角		徵		羽
陰											
陽											
陰											
陽											
陰											
陽											
陰											
陽											
陰											

平調は同じ中呂均の羽調式（主音の太簇は双調の羽に当たり、陽律）

双調は中呂均の宮調式（主音の宮は中呂で、陰呂）

よって、「双調」の主音（宮）は陰、同均の「平調」の主音（羽）は陽となる。但し、季良の言う「商調を呂、羽調を律と云習したる事」の「商調」については未詳。或いは「宮調を呂、羽調を律と……」のことか。

○徒然草 『徒然草』第百九十九段に次のようにある。

横川行宣法印が申し侍りしは、唐土は呂の国なり。律の音なし。和国は単律の国にて、呂の音なしと申しき。

○教訓抄 『教訓抄』巻第八「管絃物語」に次のようにある。

呂ト云ハ男ノ音。律云ハ女声也。

又云鳳雄也「鳴律音」。鳳ハ雌也「鳴呂音」。或人云「呂音ハ、女声ヲ云如何可尋」呂濁音「所謂大般若等」。律清音「所謂法花経也」。

陰陽云、文武云、コレヲナシ、是ヲヨクく心得ベシ。

○体源抄 『体源抄』巻十ノ下に次のようにある。

呂律事

呂律ハ国語ニ云ク、呂ハ和ゲル楽ヲ以テシ、律ハ平ゲル声ヲ以ス。文選之注ニ云、黄帝伶倫氏ニ命ジテ大夏西崑崙山ノ陰ニシテ嶰谷ノ竹ヲ取、鳳管ヲ造ル。雌雄二ノ声ヲモテ律呂トス。呂呂音也、律ハ律音也。鳳ハ呂ノ声ニ鳴、鳳ハ律ノ声ニ鳴。或云ク、呂ハ鳳、律ハ鳳トイヘリ。両記相違ナリ。但雄声ヲ律トシ、雌声ヲ呂トス。六律六呂合十二管也。呂ハ雌也、濁ナリ、短ナリ。又東ナリ、西也、地也、名也、顯

也、俗也、熱也、下也、女也、又鳳也。律ハ雄也、清也、長也。又南也、北也、天也、蜜也、真也、寒ナリ、上也、男也、又鳳也。又云、呂ハ男音也。律ハ女声也。此両記相違也。〔私云、鳳ハ呂、鳳ハ律尤也。仍鳴音之鳳ハ律、鳳ハ呂ナルハ恋テ鳴心也〕

○呂律事 『国語』「周語下」に次のようにある。

夫政象楽、楽從龠、龠從平。声以龠樂、律以平聲。

底本文の「呂律事、呂ハ和ゲル楽ヲ以テシ、律ハ平ゲル声ヲ以テス」は『体源鈔』の「呂律ハ国語に云ク……」の部分そのまま引用したものであり、またその『体源鈔』は右の「周語下」の語句をやや改変して訓じたものだと思うされる。

○文選註 「黄帝命伶倫……」に相当する『文選』の注は複数あるが、例えば『文選』巻五「京都下」左太冲「呉都賦」、「嶠谷弗能連」の李善注に次のようにある。

漢書律曆志、黄帝詔伶倫乃之崑崙山之陰嶠谷之中取竹、斬之以其厚均者、吹之以為黃鍾之管。

底本文の「文選註云」以下は『体源鈔』の「文選之注ニ云」の部分そのまま引用したものであり、またその『体源鈔』の「黄帝命伶倫氏命ジテ」律呂トス」の部分は『文選』注の語句をやや改変して訓じたものだと思うされる。

○伶倫 211「第一六律六呂之事」の「樂書要録」の注を参照。

【参考文献】

- 『雅楽を知る事典』遠藤徹著（東京堂出版二〇一三）
- 『附釈音周礼注疏』（国立編訳館主編、中華叢書・分段標点『十三経注疏』、新文豊出版公司二〇〇一）
- 『周礼注疏』（十三経注疏整理委員会整理、整理本『十三経注疏』、北京大学出版社二〇〇〇）
- 『重栞宋本周礼注疏附校勘記』（重栞宋本十三経注疏附校勘記、芸文印書館一九六五）
- 『糸竹口伝』俊鏡撰（『群書類従』第十九輯「管絃部」巻第三百四十八所収、続群書類従完成会一九五九）
- 『糸竹口伝』俊鏡撰（京都市歴史資料館蔵、一般99、国文学研究資料館デジタル画像による）
- 『源氏物語』一・四（新編日本古典文学全集20・23、小学館一九九四・一九九六）
- 『源氏物語』一・五（新潮日本古典集成、新潮社一九七六・一九八〇）
- 『源氏物語』一・三（新日本古典文学大系19・21、岩波書店一九九三・一九九五）

- 『岷江入楚』一・三（源氏物語古注集成11・23、桜楓社一九八〇・一九八二）
- 『岷江入楚』自一至十一・自廿七至四十二（源氏物語古註釈叢刊6・8、武蔵野書院一九八四・一九九七）
- 『龍鳴抄』大神基政撰（『群書類従』第十九輯「管絃部」卷第三百四十二所収、続群書類従完成会一九五九）
- 『龍鳴抄』大神基政撰（書陵部蔵Z66-799、国文学研究資料館デジタル画像による）
- 『龍鳴抄』大神基政撰（書陵部蔵Z66-888、国文学研究資料館デジタル画像による）
- 『龍鳴抄』大神基政撰（狩野文庫蔵G16885-1、マイクロフィルムによる）
- 『龍鳴抄』大神基政撰（狩野文庫蔵G16886-1、続群書類従手抄本、マイクロフィルムによる）
- 『徒然草』（日本古典文学全集27『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』、小学館一九七二）
- 『徒然草』（新編日本古典文学全集44『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』、小学館一九九五）
- 『徒然草』（新潮日本古典集成、新潮社一九七七）
- 『徒然草』（新日本古典文学大系39『方丈記・徒然草』、岩波書店一九八九）
- 『教訓抄』^{じまのうたな}伯近真撰（『続群書類従』第十九輯上「管絃部」卷第五百二十九所収、続群書類従完成会一九九六）
- 『残夜抄』藤原孝道撰、（『群書類従』第十九輯「管絃部」卷第三百四十七所収、続群書類従完成会一九五九）
- 『体源鈔』全四冊 豊原統秋撰（復刻日本古典全集 現代思潮社一九七八）
- 『国語』上（新釈漢文大系66、明治書院一九七五）
- 『文選（賦篇）』上（新釈漢文大系79、明治書院一九七七）

訂正と補足

本翻刻校注（一）2-1「第一六律六呂之事、四五頁（p.136）、朱墨部分の「周礼云」の注に以下のような誤植があった。

【誤】「春官宗伯」、「楽師」の「師掌六律六同以合陰陽之聲」

【正】「春官宗伯」、「大師」の「大師掌六律六同以合陰陽之聲」

訂正してお詫び申し上げる。

またこれに続く『周礼』鄭玄注と季良所引鄭玄注に関しては、厳密には「周礼鄭玄注」と単純に記すべきではなかったため、この「周礼云」の注全体を次のものに差し替えたい。重ねてお詫び申し上げる。詳細については右の翻刻校注（二）に既出の「周礼云」も参照されたい。

○周礼云『周礼』の該当部分は「春官宗伯」の「大師」、「大師掌六律六同以合陰陽之聲」の鄭玄注。但し、いわゆる阮元本を含む多くの伝本と季良の引用には異同がある。具体的には、阮元本等の「蕤賓又下生大呂之六四」から「夾鍾又上生無射之上九」に至る部分の「下生」と「上生」が、季良の引用では逆になっている。

これについて、阮元の校勘記は、

夾鍾又上生無射之上九、大呂又上生夷則之九五、夷則又下生夾鍾之六五、夾鍾又上生無射之上九。閏、監、毛本同、誤也。余本、岳本、嘉靖本下生皆作上生、上生皆作下生、当拠以訂正。盧文昭曰、礼記月令正義、春秋昭二十年正義、引此注皆不誤。

と述べる。さらに、例えば新文豊出版の中華叢書『分段標点十三経注疏』所収『周礼注疏』（以下分段標点本と言う）は阮元の校勘記を載せつつも鄭注本文は阮元本のままとする一方、北京大学出版社の『十三経注疏整理本』所収『周礼注疏』（以下整理本と言う）は阮元の校勘記に基づき鄭注本文を改めている。季良の引用は整理本の方に一致している。これを要するに、

阮元本・分段標点本等

季良所引・整理本等

黄鍾初九也。下生林鍾之初六	黄鍾初九下生林鍾初六
林鍾又上生大簇之九二	林鍾又上生大簇九二
大簇又下生南呂之六二	大簇又下生南呂六二
南呂又上生姑洗之九三	南呂又上生姑洗九三
姑洗又下生應鍾之六三	姑洗又下生應鍾六三
應鍾又上生蕤賓之九四	應鍾又上生蕤賓九四
蕤賓又下生大呂之六四	蕤賓又上生大呂六四
大呂又上生夷則之九五	大呂又下生夷則九五
夷則又下生夾鍾之六五	夷則又上生夾鍾六五
夾鍾又上生無射之上九	夾鍾又下生無射上九
無射又上生中呂之上六	無射又上生中呂上六

となる（傍線部が異同箇所）。阮元本『周易注疏』所載の清の陸宗楷「考証」には、

臣宗楷 按此四句、朱子鍾律篇引之、上生下生皆互易。蓋康成之法以陽生陰為下生、陰生陽為上生。但至蕤賓下生、則大呂之律短而以下皆遞短。朱子所以易之與。

とある（康成は鄭玄の字）。つまり、「蕤賓」から下生によって生成した「大呂」は本来の「大呂」より短く（二分の一に）なり、それ以下の律呂も同様に短く（二分の一に）なる。よって（八度内で三分損益を行うために）朱子は訂正を行ったのだらう、ということである。

案ずるに、「蕤賓↓大呂」で「下生」（三分損一）を行わずに「上生」（三分益二）を行えば、「大呂」以下を八度（オクターブ）内で順次生成することができる。通常の三分損益はこの形で行われる。一方、今仮に阮元本を含めた諸本の『周礼』鄭玄注が旋宮図の方式で三分損益を単純に繰り返す方式を採用していたとするならば、最後の「無射又上生中呂之上六」は「下生」となっているべきである。このことは、鄭玄注は本来旋宮図の方式を意図したものではなく、通常の三分損益を記述していたことを想像せしめる。阮元本等従来のテキストでは単に、「蕤

實」から「無射」に至る部分で「上生」と「下生」に混乱が生じていたと考えるべきであり、従って校訂としては整理本の方が妥当だと言うことができる。

季良の引用は、まさに校訂を経た整理本のテキストと一致しており、正しい形の引用であると言える。従来主に用いられていた阮元本のようなテキストを音律に通じた季良が自ら修正して引用したのか、それとも当時既に正しく記述されたテキストがあつて季良がそれを参照したのか、といった事情については未詳である。

また季良が朱子の言う「大陰陽」「小陰陽」について『楽家録』の安倍季尚の按語を引用するのは、これに続く『楽家録』卷三十三「本朝律管」「第五」に次のようにあるのを踏まえての事だと考えられる（テキストは復刻日本古典全集による）。

察十二律長短之次第、陽律中之陰管其長短也「大呂夾鐘仲呂三管比後管則雖少長、比前管則大短也」。夫陽尊、陰卑、陽全陰虧矣。以陰居陽間宜哉其不得与陽齊也。於陰呂中則不然。陰管長陽管却短「蕤賓夷則無射三管比後管則雖少長、比前管則大短也」、是亦有說耶。曰雖陽尊陰卑而陰呂者素陰位也。陽交居於其間、前後陰迫之不得発暢、是以其長短乎。律管長短雖因数成之、而数起理、理形数。律呂之妙夫可測乎矣。

最初の割り注内の「夾鐘」については、復刻日本古典全集本に「夾則・「鐘カ」とあり、一方盛岡中央公民館所蔵抄本は「夷則」に作る。直前の「第四」の季尚の按語に「陰管或属陽「大呂夾鐘仲呂是也」とあるのに基づき、ここでは「夾鐘」に改めた。

